高嶺の花

秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高嶺の花

【Ｎコード】

Ｎ５５６８Ｄ

【作者名】

秀

【あらすじ】

若手俳優のＭＡＣＨＩこと那智知明と普通のＯＬの羽根涼子のほのぼの恋愛もの。

1（前書き）

基本的にはほのぼの恋愛ものですが、多少の性的な表現があります。直接的な描写はないので特には警告はしませんが、そういうものに拒否反応のある方は読まないことをお勧めします。かといって、期待するほどの表現はありませんので、そういったものを期待される方にもお勧めしません。

1

目覚ましの鳴らない朝。
彼の休日は思い切り怠惰に始まる。
窓を覆う白いブラインドが暖かな卵色に染まる頃になるともう時計の針は１２時を過ぎている。
室温の上昇が不快感を覚えるまでになって、ようやく彼は起き上がる気になった。
ついでに気が付いた空腹感を満たすため、とりあえず冷蔵庫の中からミネラルウォーターのボトルを取り出す。
何か食べるものは、と見回すが、あいにく冷蔵庫の中にもキッチンにも、ろくなものは見当たらなかった。
（…まあ…いいか）
かろうじて先日呑んだときのつまみの余りらしいビスケットを見つけ、味気も水気もないそれを、かじる。
（今日は休日だと知ってるはずだし、多分来るだろう。その時に何か買ってきてもらえばいいや）
そう考えて、彼はふっと笑った。
寝起きですら端整としか言いようのない、日本人離れした美貌の持ち主である彼は、この上なくだらしない格好のまま、テレビを点けてソファに腰を下ろす。
適当にチャンネルを廻してもろくな意味もないバラエティしかやっていないのを確認して、やはり適当なチャンネルに固定してしばらくぼんやりとそれを眺める。
（あいつは今日は仕事のはずだから…多分夜には来るだろう）
それまでに軽くひと仕事くらいはしておくか…そう考えて、彼は大きく伸びをして欠伸をした。

日が暮れ始める頃、彼はミネラルウォーターに飽きて飲み物をブランデーの水割りに切り替えた。
多少のアルコールは彼のペンの動きを滑らかにし、仕事の仕上がりは上々だと彼には思えた。
『ピンポーン』
インターフォンが鳴ったとき、既に窓の外は日も落ちて真っ暗になっていた。チャイムの音に顔を上げた彼は、我知らず頬を弛ませながら、席を立った。
リビングの壁に設置されたインターフォンの表示をＯＮにすると、液晶画面に見慣れた、彼の待っていた人物の姿が映った。スーツ姿に髪の毛を後頭部で簡単に一つくくりにした女性の姿は、日も暮れた後に男の一人暮らしの部屋を訪問するには随分と色気のないものであったが、そんな彼女の姿に、彼は今度は隠しようもなく口許に笑みを浮かべた。
適当に返事をしながら玄関の鍵を開けると、むっとした夏の夜の熱気と共に、彼女が入ってきた。
「こんばんは。お邪魔します」
にっこりと笑いながら律儀に会釈をする彼女に、彼はつい憎まれ口を叩きたくなる。
「『お邪魔します』ってお前な、いい加減毎回いいよ、それは」
「う～ん、でも、他にどう言えばいいかわかんないし」
彼の言葉に彼女は少し困ったようにはにかんだ。黒革のパンプスを脱いでストッキング裸足になった彼女が、彼の脇をすり抜けるようにリビングへと入る。
「ケーキ買ってきたの。食べよ。…というか、夕飯はもう食べた？」
リビングに入るやいなやそう言って彼女はくるりと振り返って右手を上げた。その手に小さな白いケーキ箱があるのは、彼女が部屋に入ってきた時から彼は気が付いていた。しかし挨拶の次の第一声がそれというのも、やはり色気がないと彼は思う。
「まだ。今何時だ？」

「ん～…7時過ぎ？」
「もうそんな時間だったのか。で、お前は食べてきたわけ？」
部屋が暗くなったのに気が付いて電気を点けた以外、今日は時間の経過を感じる出来事もなかったため、彼は今日半日、時計というものを見ていなかった。しかし7時過ぎということは彼女とて仕事を終えてすぐにこの部屋へ来ているはずである。
「ううん。まだ。そっか、そうだよね。じゃあ、ご飯作ろうか…」
案の定首を振った彼女が、彼の反応を待たずにキッチンスペースへと向かう。彼女はこの部屋へ入ってから、鞄をソファーの脇に置いて、グレーの夏用スーツの上着を脱いで、ソファーの背に掛けただけである。せわしないと言うべきなのか。しかしこれが彼女の常なのだと思うと、彼にはくるくる動く彼女が微笑ましくもあった。まったく、こういうところは、彼よりも5歳も年上とはなかなか思えない彼女の部分なのであった。
「…トモさん…今日、何食べました？」
何気なくキッチンスペースへと向かっていた彼に、彼女が低い声をかける。冷蔵庫の扉を開けて中を覗き込んだ姿勢で、顔だけをこちらに向けている。
白いカットソーにグレーの膝丈のスカート。後頭部で纏められたふわりとした髪の毛の合間から小花を象ったシルバーのバレッタがちらりと光る。彼が職場で見慣れた女性たちのように細ぎすではなく、間違いようのない女性らしさを主張する身体のラインがそこにある。むき出しの肩がゆっくりとこちらに振り向いて、眉を顰めた表情が彼を斜めから見上げてくる。
「…冷蔵庫、空っぽなんですけど」
「ああ、そうだったっけ。涼子サンに何か買ってきてもらおうと思ってたんだよ」
出かけるのがめんどくさかったからさ、と続ける彼の返事に、彼女は演技がかったため息を吐いた。
「…だったら、先に言っといてくださいよ。て言うか、あなたの仕

事、身体が資本でしょう。こんな時間からアルコールとタバコの臭いしかしないんじゃ、ダメじゃないですか…」
尖らせた唇。顰めた眉。色白の頬のラインの向こうになだらかな丸みのある肩のライン。白いカットソーに覆われた豊かなバストのラインから、バランスよく引き締まったウエストには両手が当てられて。
睨みながら見上げてくるその表情が、そのわざとらしい芝居がかった仕草が、不意に彼の脳髄のどこかのスイッチを押す。脳のどこかにじわりと熱が広がる。
そんな彼の様子に気付かないまま、彼女はじっと彼の顔を正面から見上げたまま睨みつけていたが、彼からの反応がないと分かると、顔を逸らして小さくため息をついた。
「しょうがないなあ、もう」
呟きながらするりと身を翻すと、彼の脇をすり抜けてすたすたとリビングに入って行った。彼は彼女に向かって持ち上げかけていた腕の行き先を失って、少しの間、固まっていたが、すぐに気を取り直すと振り返って彼女の背を追った。
「どこ行くんだ？」
「どこって…買い物してきてほしいんでしょ？」
リビングのソファに立てかけたバッグを取り上げている彼女を呼ぶと、振り向きもしないで彼女は答える。その背中を彼は無言で抱きしめた。
「…ひゃ！」
すっとんきょうな声を上げて、彼女が振り返りながら後ずさりする。
「……」
一瞬の内に腕の中からすり抜けていった彼女に、おもむろに視線を向ける。
「あ…えっと…いきなり何すんの……って……」
反射的に逃げてしまったものの、彼女には別に悪気も何もなかっ

た。しかし自分のその行為によって相手がどう感じたか、別に難しく想像するほどのことでもなかった。だから彼女は慌てて彼の顔を見上げて、そして固まった。

彼が、じっと彼女の目を覗き込むように、ただじいっと見つめていた。

混血を疑われる彫りの深い、エキゾチックな顔つき。きめ細かいが、決してひ弱さを感じさせない白い肌と、紅でも注したかのように紅い唇。存外に太くくっきりとした眉。彼女にとって既に見慣れた彼の容貌は、しかし今この瞬間、何も目に入らなかった。ただ、彼女の視線にかっきりと合わせてくる、黒々とした瞳だけが、彼女の視界を捉えていた。

知らず、彼女の鼓動が早まり、息苦しささえ覚える。視線を逸らせばよいようなものだが、何故だかそれはできなかった。呼吸も、思考も、身動きすることも、全てを忘れてただ呆然と彼の瞳を見つめている。

す、と彼の両腕が彼女に差し伸べられ、するりと背中と腰にまわされる。そしてそのまま軽い力で彼女の身体を引き寄せた。

「…っあ！」

彼の体温に正気に戻った彼女が反射的に身体を離そうとすると、背中が壁に当たった。彼の視線に押されて、無意識に後ずさりし続けていたらしい。そうと気付いたが既に遅く、もう一度ぐっと背中にまわされた腕に込められた力で引き寄せられた。その間も彼の視線は彼女から一瞬たりとも離れなかった。

（ええと、何でこうなってるのとか、いつの間にこんなところにいるのとか、ええ、何してんのとか、離れてほしいというか、見るのやめてとか、せめて何か言ってとか、ええっと、えーと）

疑問や要望は山ほどあるが、それらは音声にならなかった。ただ空しく口を開閉するだけの彼女を、彼はやはりただじっと見つめ、それからようやくふっ、と笑顔になった。

（うわあああああ〜〜）

しかしその笑顔は彼女にとっては好ましいとか爽やかとか言う以前に、凶器であった。獲物を追い詰めた肉食獣の表情。
（いや、悪戯の成功を確信した、“にやり”だ！！）
胸の奥は何かが燃え上るようにかあっと熱いのに、皮膚の表面は冷や汗が流れているようにぞっとする。その混乱した身体の反応に、ますます彼女の呼吸が乱れる。
そんな彼女の様子を、表情も変えずに見つめていた彼は、衣服を挟んで密着した身体越しに全て感じ取っていた。そうして自分の仕掛けに期待通りの反応を示してくれる彼女に、込み上げてくる笑いを、とうとう留めることができなくなった。ゆっくりと彼女の背を撫でるように腕を持ち上げ、彼女の首筋に掌を沿わせると、器用に髪留めを外した。ばらりと彼女の柔らかな髪の毛が彼の掌から零れ落ちる。そのまま後頭部を固定すると、頬を紅潮させたまま硬直している彼女の、薄く開いた唇に唇を重ねた。

最初は優しく、徐々に激しく、長く。何度も啄ばんで、角度を変えて、彼女が呼吸を求めて大きく口を開けたところで、舌を絡める。
拒むように二の腕を掴んでいた彼女の腕からは間もなく力が抜けて、彼の肩にただ添えるように乗せられている。
彼は彼女の腰を抱える腕に力を入れて、より互いの身体を密着させる。
彼女の首筋が、頬が、漏れる吐息が熱かった。支えられるに任せて彼に身体を預ける彼女から、早い鼓動が伝わり、それが彼の熱を煽る。
「くるし…」
ぽつりと彼女が呟く。離れた唇に名残惜しさを感じつつ、そのまま彼は唇を滑らせ、撫で下ろした腕で背中を引き寄せると、首筋に顔を埋めた。
「う……」

弱い場所をくすぐる感覚に、彼女が身を捩った。彼の肩に乗せた手が、ぴくりと震えて指に力がこもる。その間にも彼の手は動きを止めず、腰にまわされていた腕がゆっくりと力を抜きながら下へと手を這わし、背中をしばらく撫でていた掌はゆっくりと脇腹を通って腹を滑り、胸に触れた。

「……！ちょっ……」

彼女は反射的に掌を避けようと身じろぎした。しかしすぐに肩が壁に触れ、逃げ場がないことを知らしめる。

「ちょっと、もう、やめてよ…」

ようやく言葉らしい言葉で彼女が彼の肩を押す。ようやく顔を上げた彼は、熱のこもった瞳で彼女を見、にいっと唇を笑みに歪める。彼のそんな表情に、彼女の胸はどきりと鼓動を強めるが、やや理性の戻った脳は、続けて言葉を紡ぐ。

「いきなり、何なのよ。まだご飯も食べてないし、お風呂にも入ってないのよ」

「いいよ、そんなの」

「ご飯作ってって言ったのはそっちでしょ」

「後でいいや」

「汗もかいてて気持ち悪いんだってば」

「…じゃあ、風呂入る？」

彼がにやりと再び人の悪い笑みを浮かべる。え？と彼女が思ったとたん、彼女はひょい、と抱え上げられていた。

「えええっ、ちょ、まっ……！」

ぐらりと崩れたバランスに、慌てて彼の首にしがみつくと、彼がゆすり上げるように彼女を抱え直した。そのままバスルームへと歩き出す。

（私、重いんだけど～～！）

瞬間浮かんだ思考はこの危機に際して何ら彼女を救うものではなく、そのことに気付いて彼女は更に頭に血が上る感覚を覚えた。

「ちょっと、まって…」

抗議する間もあればこそ、到着した脱衣所で下ろされると、再び唇を奪われた。

（ああ、もう、この人は……）

彼の強引さに対する多少の呆れと、彼の熱に対して湧き上がる情熱に、彼女は諦めて身を委ねた。

2

ＭＡＣＨＩといえば、今や日本中で知らぬ者はいないであろう。特に年齢問わず女性に絶大な人気を誇る、若手俳優である。

男性向けファッション雑誌のモデル出身の彼は、すらりと均整の取れた長身に、ハーフかクオーターかと思わせる日本人離れした端整な容貌で、デビューしてたちまちのうちにアイドル的な人気を得た。彫りの深い貌のつくり、筋の通った高い鼻筋、切れ長の瞳と短めの髪は驚くほど黒々としていて、白皙の美貌に艶を添えていた。加えてデビュー時の十代後半の少年から青年へと変化する時期の、繊細でどこか危うげな雰囲気も、年齢問わず女心を惹きつけてしまった。

かくしてバラエティーからドラマ、果ては歌手まで、各メディアへの露出により、１年ほどで人気は確たるものとなっていった。数年はそんな感じでマルチな才能を持ったタレントとして活躍していたが、１年ほど前からは俳優一本に活躍の場を絞っており、最近では演技力の高さが認められ、国外からのオファーもちらほらきているとのもっぱらの噂である。

そんな彼の人気に拍車をかけているのが、徹底した秘密主義であった。

「ＭＡＣＨＩ」は日本人であることは確かなので、当然芸名であるが、本名は公表されていない。年齢も、デビューしてからの年数を考えると二十代であることは恐らく確かであろうが、はっきりしたものは公表されていない。生年月日等一切のパーソナルデータも非公表。そして、それだけ目立つ美貌の持ち主でありながら、不思議なことに私生活が一切暴かれることがないという、ほとんど謎の領域の事実があった。デビュー当時にはバラエティー番組にも出演していたことがあったため、かろうじて「実は実物は存在しない」という説は否定されている。また、十人中十人が認める美貌と色気の

ため、スキャンダルの噂は常に存在する。しかし、今まで一度も現場をおさえられたことがないため、結局は全て証拠のない、単なる噂話程度で収まってしまっているのである。

「実際、うまくやってるよな、お前さんは」
そう言って、藤本章一が笑った。読んでいた雑誌のページをひらひらとＭＡＣＨＩの眼前にかざしている。ＭＡＣＨＩは無造作に粗悪な紙の束を掴むと、ちらりと誌面に目を走らせる。そこにはここ数日芸能リポーターの注目を浴びている某アイドルの『熱愛報道』が派手に書き立てられていた。紙の荒さと印刷の荒さでほとんどドットの集合体くらいにしか見えない『決定的瞬間』の写真も、見開きど真ん中に掲載されている。
今は舞台稽古の休憩中である。藤本章一はＭＡＣＨＩ同様、モデル出身のタレントで、俳優をやりながら趣味である音楽でもメジャーデビューして活躍している。爽やかな好青年という表現がぴったり当てはまる容姿の藤本は、性格も男気があって爽やかで、ＭＡＣＨＩとも普段から親しい間柄である。今回、彼らは偶然同じ舞台に出演することになったのである。
「うまくやってるって、何がだよ？」
ＭＡＣＨＩが言うと、藤本がわざとらしく肩を竦めてみせた。
「よく言うよ。この芸能レポーター泣かせ。ばれてないだけで、お前相当遊んでたろ？」
「遊んでたというのは語弊がある。俺は普通に恋愛していただけだ。そんな個人的な事情をわざわざ他人にひけらかすような露出趣味は俺にはないだけだ」
藤本のからかいに、ＭＡＣＨＩが平然と答える。そのあまりの堂々とした言い草に、藤本も苦笑を返すことしかできなかった。
別に露出趣味のある人間がこういった雑誌にスクープを載せられるわけでもあるまいに、と藤本は思った。言うまでもなく、こうい

った報道をされる人間のほとんどは、むしろ世間から自分たちを隠そうとしている人間の方が多いに違いない。それでも暴かれるのがたいていの場合で、それをかいくぐって秘密の交際を貫き通せる芸能人というのはごく稀であろうと彼は思う。

実際、藤本とて何度かこういった雑誌に追いかけられている。彼自身があまり気にしていないのは、単純に最近、芸能界に入る前から交際を続けていた女性と結婚をしたからであった。

「だいたい、こいつ、わざと写真撮られやすいとこ選んで歩いてるんじゃないか？真夜中にフード被ってサングラスかけて歩いてる一般人がどこにいるんだよ。ご丁寧に彼女の方のマンションの近くで撮られてるみたいだし」

ＭＡＣＨＩが苦笑しながらぺらぺらと雑誌のページをくる。

「じゃあ、お前はどうしてばれないんだ？何か秘訣でもあるのか？」

藤本の問いにＭＡＣＨＩが目を見開く。

「…秘訣ぅ？んなもん、ないよ。ていうか、小細工なんてすればするほど馬鹿を見るだろ？」

「…隠してもないってのか？」

「別に…目立つ行動とってないってだけだな。隠すって言うか。けっこう、気付かれないぜ？俺」

「それが一番の謎なんだがなあ」

藤本が呆れたように笑う。実際、ＭＡＣＨＩは同性の自分から見ても相当整った容姿をしている。身長だって、ずば抜けて高いわけではないが、人ごみの中で頭一つ抜けるくらいには高い。たとえ彼が芸能人でなくとも、人目――特に女性の好奇の目は充分に惹くであろうに。だが実際、彼が芸能界に入ってからこれまで数年、ＭＡＣＨＩの姿がこういった写真雑誌に捕らえられたことは一度もないのであった。

――いや、正確に言えば、恋愛スキャンダルが取り上げられたことはない、というべきか。というのは、ＭＡＣＨＩは１年ほど前、しばらく行方をくらましていたことがあった。その頃既に親交のあ

った藤本も全く彼と連絡が取れなかったし、他の友人たちの誰も、彼の行方を掴むことができなかった。事務所のスタッフですら、数日ＭＡＣＨＩの所在を捉えることができずに、相当慌てていたものである。

結局、数日の行方不明で、すぐにＭＡＣＨＩは事務所に姿を現わしたのであるが、その後もちょっとしたトラブルで、解決まで半年ほどは後を引くこととなった。その間のことは、これは事務所が総力を挙げて外部に不必要なことを漏らさないよう対処したため、当たり障りのない程度の記事が数回、雑誌に載った程度でいつの間にやら話題も消えてしまっていた。彼の近くでその一連の騒動を見聞きすることができた藤本は、その鮮やか過ぎるＭＡＣＨＩと彼の事務所の情報操作の手腕に感嘆を覚えたほどであった。

「…で？ところで、『彼女』は元気か？」

唐突に口調を変えて藤本が尋ねた。

「…元気だよ？昨日も泊まりに来てたし」

平然とＭＡＣＨＩが答える。しかし藤本は、彼の声の微妙な震えと表情の微妙な波立ちを見逃さなかった。

（でもこれ、『秘密を嗅ぎ付けられたから』っていう動揺じゃなくて…）

「…お前、顔がのろけてるよ」

藤本の冷静な指摘に、ＭＡＣＨＩは反射的に片手で口許を覆った。

彼――ＭＡＣＨＩは本名を那智知明という。芸名のＭＡＣＨＩは、本名の苗字をもじっただけのものなのである。そんな彼の平静を崩せる、現在唯一の存在が『彼女』こと、羽根涼子であった。

彼が羽根涼子に初めて出逢ったのは約１年ほど前のことで、紆余曲折を経てやっと「付き合う」という状態まで漕ぎ付けたのが、それから３ヶ月ほど後のことであった。

ＭＡＣＨＩが一人の女性を口説き落とすのに３ヶ月もかかったと

いうのは、藤本の知る限り、彼にとっては最長記録であった。それ以上に藤本が驚くのは、彼女よりも彼の方が関係を築くのに積極的であったこと――つまり、初めに惚れたのも、相手を手に入れることに執着を見せたのも、ＭＡＣＨＩの方であったということであった。そして更に藤本を驚かせることに、未だに二人のその状態は変わらず続いているらしきことであった。

（この男をここまで前後不覚にする女って一体どんな奴なんだか）

「今度、俺にも紹介してくれよ、えーと、羽根さん？だったっけ？」

「涼子サンを？……そりゃ、かまわないけど。でも何で？」

心から不思議そうな顔で自分を見るＭＡＣＨＩに、藤本は少々意地の悪い笑みを返した。

「どんな人間も本気にさせることができなかった那智知明っていう男を虜にしているすごいヒトに会ってみたいからだよ」

＊＊＊

「…ってなこと言われたよ」

「……私は見世物ではないんですが」

那智知明が昼間あったことを話すと、羽根涼子は深くため息をつきながら答えた。

言いながら、彼女はキッチンから知明のいるリビングスペースに入ってくる。さりげなく、しかし律儀にキッチンの電気を消して来るあたり、彼女の性格を示していた。

涼子は手にしていた皿をローテーブルに置くと、知明と反対側にまわって座った。皿の上には山盛りの肉野菜炒めが湯気を立てていた。

「お～～ありがと～～。悪いな、わざわざ」

彼は既にご飯とスープに舌鼓を打っていたが、新たに登場したおか

ずに、早速箸をのばす。
「…でも、よかったんだよ？飯とこれだけでも」
彼がご飯茶碗とスープ皿を順に指しながら言うと、彼女は眉を顰めてみせた。
「…そういうくらいなら、事前に電話くらいはしてきてくださいよ…普段一人分しか夕飯なんて作んないですもん、残り物のご飯とスープだけじゃ、いくらなんでも夕飯にはなんないじゃないですか…」
「ごめんごめん、急に思い付いたんだよ」
ローテーブルを挟んだ向かいに座る涼子は不機嫌そうな表情だった。食事をしているのは知明だけで、彼女は大きめのマグカップを抱えているだけだった。
そんな彼女に彼が話すところによると、こうだった。
知明は今日は一日舞台稽古のみで、他の仕事は入っていなかった。当初は夕方頃には終わる予定だった舞台稽古は出演者全員何やら白熱して、なかなか終わらず、終わってみると１０時近くになっていた。練習中は気が張り詰めて集中していたが、緊張が解けると、急に空腹感が襲ってきた。自宅に戻る途中に何か食べるか、買って帰るか、考えたときに、その練習場が羽根涼子の家のすぐ近くであったことに気が付き、それならば…と訊ねることにしたのだ、と。
「それならそれで、思い付いたときに電話の一本…いや、メールでもいいですけど、くれたらよかったのに…」
「悪い悪い、いきなり行ったら、涼子サン、驚くかな～と思って」
案の定、びっくりして目をまん丸にしてる涼子サン見れたし、と知明は何やら大変嬉しそうな表情をし、肉野菜炒めをご飯の上に載せて口の中にかきこんだ。その、世間一般の『アイドル』のイメージにそぐわぬ豪快な食べっぷりに軽く目を瞠りながら、彼女はそれでもまだ不機嫌な様子であった。
「そんな子供みたいな…」
ぶつぶつと呟く彼女の声が聞こえているのかいないのか、更に彼は続ける。

「それに、涼子サンの飯、今日こそは食べたかったし」
何気なく続けられたその言葉に、涼子がぴくりと小さく頬を引き攣らせる。
「…それに、今朝はあわただしく帰っちゃったし…大丈夫だったかな、ていうのもあったし」
更に続けられる彼の言葉に、涼子は頬をかあああ～っと紅潮させる。
（そんなこと恥ずかしげもなく言うな～～～！）
表情を隠すように、涼子は顔の半分が隠れるほど大きなマグカップに顔を伏せた。頭ごとくい、と仰け反らせるようにしてひと口含む。冷めたインスタントコーヒーがぎこちなく口内から喉へと通っていく。

昨夜涼子は結局、知明の部屋で朝まで過ごした。――というよりも、彼が離してくれなかったと言った方が正しいと彼女は思っている。――その点に関しては知明にも言い分はあろうが。
ともかく、彼のベッドで彼女が目を覚ましたのは日の昇る少し前、4時過ぎ頃であったろうか。慌ててヘッドボードにあった時計を見ると、彼女はしばらく針の指す3と4の数字を眺めて、それが午前のものか午後のものかを、真剣に、しばらく考えた。それから慌てて半身を起こして、ベランダに続く掃出しのサッシ窓に目をやる。レース一枚だけ引かれたガラスの向こうは、まだ暗かった。しかしそれは夕方の暗さではなく、明け初めの濃い群青色であった。どこかで鳥の鳴く声が微かに聞こえる。ようやく朝だと確信すると、慌しく服を拾い、身支度を始めた。
彼女の気配に気が付いた知明が目を覚まし、最初不思議そうに、それから不満そうに、最後に残念そうに、表情を変えた。
「いっそ今日は泊まっていくとか」
「私は今日は仕事です！」
「うちから通ったっていいじゃないか」
「着替えもメイク道具も持ってきてないもの。うちに戻って仕度し

なきゃ」
　食い下がろうとする知明のセリフにも涼子は負けず、手早く簡単に身支度を整える。そして途中で引き止めるのを諦めた知明が呼んでくれたタクシーに乗って、早朝、日が昇り始めたばかりの時間に、自宅へと戻って行ったのである。

「今日は眠くなかった？」
「…大丈夫！でした！」
「そう、よかった」
　にっこり、と笑って問いかけてくる知明に、涼子はぶっきらぼうに返す。不機嫌そうな表情だが、頬の紅潮は隠しようもない。知明はそんな彼女をほほえましいものを見るような表情でしばらく見つめていたが、やがて彼女から目を逸らし、食事に専念した。

「…で、トモさんは何て答えたんですか？」
　しばらくＦＭのラジオに耳を傾けていた涼子が、ふと思い出したように知明を見た。唐突な問いかけに彼はしばらくきょとんとしたような表情をみせたが、すぐに少し前に自分がしていた話題を思い出した。
「ああ、藤本さんね。別に。そのうち機会があったら、て答えたよ」
　特に具体的な約束はしていない、と聞いて、涼子がほっとしたように息を吐いた。
「そりゃあ、気が進みませんよ。藤本章一って言ったら、すごい人気のあるタレントさんだし。私、平凡なただの会社員ですもん。世界が違うというか」
　そんなに嫌か？と訊くと、彼女はそう答えた。軽く眉を顰めながら答えるその様子には含むものは全く感じられなかった。
「一応、俺だって『すごい人気のあるタレントさん』なんだけど」
「でも、トモさんはトモさんじゃないですか」
　からかうような知明の言葉に、涼子は即答した。その、いかよう

にも取れる彼女の返答に、知明は探る視線を彼女に向ける。しかし涼子は既に彼から視線を外して、ＦＭラジオから流れてくる音楽に耳を傾けているようであった。マグカップを唇に当て、ぼう、とした視線をラジオの方に向けている。
彼女は既にメイクを落としていたが、普段からナチュラルメイクで通る涼子の素顔は、よく聞くような、「メイクとすっぴんは別物」というタイプのものではなかった。淡い茶色の髪の毛は、後頭部で簡単にひと括りにされていた。太目のヘアバンドをヘアゴム代わりに使う先から奔放にはねる淡い茶色の毛束。マグカップに押しつぶされた柔らかそうな唇のふくらみ。
「…悪かったよ」
知明がぽつりと呟く。
「今度からは電話する」
言ってから、残りのご飯を口内にかきこむ。
「ごちそうさま。美味かった」
涼子がふう～っと長く息を吐く音が聞こえた。合掌して視線を下に向けていた知明が彼女に目をやると、涼子は立ち上がろうとしているところだった。マグカップをローテーブルの上に置いて、そのままぐるりとテーブルを回って知明の方へ来る。彼女が自分の後ろを通ろうとしていると思った知明は、軽く腰を浮かせて彼女の通り道を広げようとする。しかし彼女は彼の後ろを通り過ぎるのではなく、す、と彼の横に膝をついて屈んだ。
「…ごめんなさい、ちょっと言い過ぎました。…ちょっと……不機嫌になりすぎました」
涼子はそう、彼の耳元で囁くと、彼が振り向くより早く、すっと顔を近づけた。ちゅ、と知明の頬に軽く唇を押し付ける。
「お茶淹れてきますね」
にっこりと笑った涼子が、キッチンへと去っていく。その口調にも、先ほどまでの不機嫌な様子はもうなかった。
（俺のこと、恥ずかしいやつって貴女は言うけどさ…）

知明はゆっくりと上体を傾け、肩の先で背後のユニットボードにもたれる。大変不自然な姿勢だが、床に付いた両肘でしばらくその姿勢をキープする。

（……俺に言わせりゃ、不意打ちの『ほっぺちゅー』の方がよっぽど照れくさいんですけど～～）

先ほど涼子の唇が触れた柔らかい感触からじわじわと熱が広がっているような錯覚がある。知明の背中はそのままずず、とすべって床にべたり、と落ちた。

羽根涼子の家は、都内の繁華な地域に近いところにある。最初はよくこんなところに若年の女一人で部屋を借りれるものだと思ったが、聞いてみると、意外に家賃は手頃なのだという。確かに住所としては繁華街の地域だが、表通りから一本裏に入ると雰囲気はまるで変わり、古びたアパートや民家の立ち並ぶ地域になる。彼女の家もそんなところにあり、多少の治安の悪さを除けば、通勤にも便利で静かな場所である。

「かなり不動産屋さんまわりまくって粘りまくって、やっと発掘しましたからね～」

その話をした時の彼女の得意そうな笑顔は、まるで子供のようにかわいらしかったことを彼は思い出す。

部屋は２Ｋだが、かなりの築年数のためか、意外なほど間取りは広く、キッチンスペースや水周りにもゆとりがある。和・洋の２室の内、和室はリビング兼寝室――つまりは日常使いの部屋であり、決して広くはないがうまいこと家具が配置された部屋は、『女の子』あるいは『女性』らしさにはいまいち欠けるものの、適度に居心地のよい生活感があって、彼は気に入っていた。

もう一室の洋室は和室と同じ広さだが、そこを彼女は趣味の作業場として専用に使っていた。

キッチンでお湯を沸かす音や食器を用意する音が聞こえる。それ

を聞きながら、彼は静かに洋室の扉を開けた。暗がりの中にイーゼルの影が浮かび、サッシから漏れるネオンの明かりに、立てかけられたカンバスやら何やらが見える。微かに揮発性のオイルの臭いが鼻をつく。

彼女の趣味というのは、つまり油絵なのであった。入口側の壁を探ってライトを点けると、白い蛍光灯の光が部屋に溢れる。イーゼルには描きかけの絵が載せられている。まだ下絵からそんなに進んではいない状態のようであったが、木立に囲まれた神社か何かのようであった。

「あれ、そっちにいたんですか」

彼の背後、入口から彼女が覗き込んでいた。どうやらお茶が入ったらしかった。

「ああ、まだ描きかけなんですよ。やっとね、この辺りとかはっきりしてきたくらいで」

絵の描き方は人それぞれであろうが、彼女の場合は全体的にぼやけた色調の下塗りから徐々にくっきりした色に、厚く、何度も何度も塗り重ねていく方法を採ることが多かった。今回もどうやらそういうことらしく、まだはっきり輪郭が見えているのは画面下方の石段らしきものくらいであった。

「けっこうね、思った以上に石の表情を再現するのって難しいんですね。どれだけ記憶に近い色を作っても、どれだけ写真を見て色を合わせようとしても、塗ってみたら全然思うような感じにならなくて。気が付いたらそこだけ妙に進んじゃってまして。全体のバランス悪すぎなんですよ」

苦笑しながらも嫌々な口調ではなく、むしろ活き活きした表情で語る彼女は、表情にも瞳の明るさにも、全身で好きなことに打ち込む楽しさが溢れていて、絵のことはよく分からない彼も、不思議と楽しい気持ちにさせられてしまうのであった。

羽根涼子は、普段は一般企業に勤める、平凡なワーキングウーマンである。しかし趣味も諦めたくないと、時間をつくっては絵を描

き続けているのだという。今現在は基本的に油絵だが、表現したいものによって画材は変わるのだという。
そして彼は、そんな風に自分のやりたいことに貪欲に打ち込める彼女が、とても好きなのであった。
「そういえば涼子サン、風景画ばっかなんだね。人物画とかは描かないの？」
彼の素朴な問いに、彼女はう～んとうなりながら小首をかしげた。
「何でかは知らないけど、人物画には興味が向かないんだよね。基本的に描きたいものしか描かないわけなんで、例えばこの辺散歩していて、今まで知らなかった神社を見つけた！意外にきれいだ！ここ描いてみたい！…ってのは思うんだけど、ベンチに座って日向ぼっこしてるおじいさん、なかなか様になるなあ、とは思うんだけど、じゃあ、描いてみよう！…ていう気にはならないんだよね。何故だか」
「家族とかも描いたことないの？」
「う～ん…描いたことがないわけじゃないけど…確かすごい不満足な出来で提出せざるを得なくって、いい思い出がない…のかも」
昔々学生の頃だけどね、と彼女は苦笑して続けた。
それじゃあ描きたくなったら描くのか？と訊ねると、多分そうだと思う、との返事が返ってきた。
「じゃあ、そのうち俺を描いてよ」
彼が笑いながら、軽い口調で言った。
「そうですね、…そのうち、気が向いたら描くかもしれません」
素直な笑顔で答える彼女に、知明は満足そうな笑顔で頷いた。

3

けたたましい目覚まし時計の音で、羽根涼子は目を覚ます。
枕にうつ伏せたまま腕を伸ばし、いつもの場所にある時計を操作し、音を止める。
静寂に戻った部屋の中、ベッドの上でしばしもぞもぞと体を動かす。うっすら開いた瞼の隙間から卵色の光が視覚を刺激する。薄手の夏掛けの布団はとっくに足下で団子状態になっていて、抱きしめている枕以外はタンクトップと短パン以外何も身に着けていないのに肌はじっとりと汗ばんでいて、次第に明確になる全身の感覚が不快感を叫び、涼子はようやく体を起こした。振り向いて時計を見ると、７時を１０分ほど過ぎていた。
簡単にシャワーで全身の汗を流すと、上下下着姿で頭からタオルをかぶったまま、朝食の仕度をする。オーブントースターに食パンを放り込み、コーヒーメーカーをセットする。電器ポットに充分お湯があることだけを確認すると、部屋に戻り、テレビを点けながら衣服を身に着ける。天気予報だけはしっかり確認すると、キッチンに戻り、ちょうど出来上がったトーストとコーヒーに、カップスープで朝食を済ませる。
メイクをして、髪を整え、いつもと同じ時間に家を出る。始業３０分前にオフィスに着くと、彼女の部署には、今日はまだ誰も来ていなかった。
簡単に身だしなみを整え直すと、デスク周りを掃除する。始業１０分前には同僚も揃い、既にパソコンに向かって仕事を始める姿もある。
涼子が働いているのは、某外資系の商社で、彼女はその秘書課に配属されていた。
ちなみにその配属通知に一番驚いていたのは、恐らく彼女自身であったろう。語学が特に並外れて良いわけでもなく、容姿も殊更抜き

ん出ているわけでもない。あえて言うなら、いかにも真面目そうな外見と、落ち着いているように見える仕草や言葉遣いが対外的に清潔感を与えていると言えなくもない。その辺りが人事担当者の目に留まったのだろうかと、涼子は考えている。

実際のところ、秘書課といっても何人もスタッフがいるわけで、その全員がよくドラマや映画で見るように重役たちのそばに付き従っているということではないわけで、そういった自分自身の偏見に近い秘書業務のステレオタイプを、仕事に慣れていくうちに涼子は改め直していった。

それはともかく、既に5年目にもなる仕事は慣れたものであり、今日の業務も特に問題はなく、あっという間に午前中の時間が過ぎる。

昼食は同じ課の女子社員で連れ立って社外のランチに出かける。涼子は時には弁当を持参することもあるが、基本的にはこの時間は皆と行動を共にすることにしていた。就業時間中にプライベートな付き合いを持ち込むことをあまり好まない彼女は、従業員同士が、就業時間以外あまり行動を共にすることもないこの社内で、この昼食時間に同僚とのコミュニケーションを図ることとしていた。

その日は5人ほどで連れ立って歩き、行き慣れたカフェに入った。その店はおしゃれだがランチメニューは質、値段ともに手頃で、涼子たちが愛用している店であった。

オープンテラスに席を取り、それぞれ注文をすると、誰からともなくおしゃべりが始まる。涼子は元々芸能情報などにはあまり詳しくなかった。そのため今までは、こういうおしゃべりではなかなか輪に入ることができなかった。しかしここ最近、大分詳しくなった、というのが周囲の一致した意見である。

（そりゃあね）

涼子は自分にも分かる最近のドラマの話に相槌を打ちながら内心思う。

（トモさんと付き合ってれば嫌でも情報は入ってくるし、気にもな

るし…）
そして自分の思ったことに不覚にも照れて、慌てて冷やの入ったグラスをあおる。
　実際、彼女は少し前まで芸能界というものに全く関心がなかった。そう言うと知明は「絵描きなのに！？」と驚いていたが、むしろ涼子に言わせれば絵描きだから大して気にしていなかった、ということになる。人物画を描くことにも見ることにも大して興味がなかったから、というのもあり、プライベートの時間を全て趣味に費やしていたような時期もある涼子にしてみれば、テレビなど見ている暇も時間もなかった。普通のニュースや雑誌広告にも頻繁に名前や顔の載っていた「ＭＡＣＨＩ」のことは、知ってはいたが、それだけという有様であった。
　今ではさすがに、その当時の自分は極端であったと涼子自身思っているが、反対にその程度の認識であったからこそ、知明と今の関係を築けているのだろうと思うと、なかなか複雑な心境になる涼子なのであった。
「…どうしたの？羽根さん」
　ふと気付くと、隣に座っている後輩がぼんやりしていた涼子の顔を見つめていた。
「え？あ、ごめん、ちょっとぼんやりしてた。何？」
少々慌てて取り繕うように周囲を見回すが、特に妙な反応は起こらず、涼子は内心安心した。
「いや、特に何もないけど」
正面に座っていた一年先輩の苫野麻希子が微笑んだ。外見も内面もおっとり穏やかな苫野は男性のみならず女性からの評判もよく、涼子もこの部署の中では特に気を許せる相手と認識していた。
「…あれ、そういえばそのピアス、見たことないや。かわいいね」
「あれ、そういえば。おニューですか？」
　反対隣の後輩が涼子の耳にしげしげと視線をやる。
「ああ、うん。少し前に買ってたんだけど、そういえば、会社に着

けてくるのは初めてだったかな？」
微かに口許を緩めながら、涼子は指で軽くピアスを揺らす。いぶし銀加工されたシルバーのピアスは、左右違うモチーフが揺れるタイプで、右に四葉のクローバー、左にてんとう虫をつけていた。モチーフはいずれも小さいので普段のように髪をまとめていても、あまり目立たない。しかし近くでよく見れば、繊細な細工が施されていたり、さりげなく貴石が埋め込まれていたりするのがわかるもので、そういったものが涼子は好きなのであった。
「そういえば、羽根ちゃん、ピアスにした頃からなんか変わったよね」
　苫野がにこにこしながら言う。その言葉に内心涼子は冷や汗をかいた。
「…そうですか？」
「うん、なんか、きれいになったっていうか」
「そうそう、何か女らしくなりましたよね」
「いや、そんなことは…」
しかしその辺りは実は想定済みで、表面には動揺を表すことなく、涼子は不思議そうな表情を作って首を傾げてみせる。
「そもそも何でピアスにしたの？ずっとイヤリングだったよね？」
「いやあ、穴開けるのがずっと怖かったんですけどね…すごいほしいデザインのピアス見つけちゃって、これ着けるためならいいや！…って思い切って」
「ああ、でも、なんかありますよね。そういうきっかけって」
あっさり納得してくれた周囲に涼子は内心ほっと胸を撫で下ろす。
（…買ってくれたのは、トモさんだったけど）
　その当時まだピアスホールを開けていなかった涼子に、それと知らない知明がプレゼントしてくれたのが、小さなピンク色の石の付いたピアスであった。かわいらしくて確かに涼子の好むタイプであったが、それがピアスと気付いて正直に困った顔をした涼子に、知明は更に困ってうろたえていた。そんな彼を見ていると返品したり

イヤリングに作り変えてもらったりするのも気がひけて、思い切ってその足でピアスホールを開けに行ったのである。
それが知明からの初めてのプレゼントであり、多分付き合い始めたのもその頃からであった。そういうことを考えると、間違いなくその辺りから彼女たちの感じているであろう『涼子の変化』は起こっていたのであろう。
（確かに、まあ、変わったんだろうな、私は……）
そう考えると、ふと涼子は俯いた。思わず浮かぶ憂鬱な表情は隠しようがないことにとっさに気付いたからであった。

午後もさしたるハプニングもなく、突発的な残業も発生せず、珍しいほど穏やかにその日は一日が終わった。ハプニングが日常茶飯事といってもよい秘書課でこんな穏やかな日は珍しく、そんな平穏さを最後まで満喫するため、涼子は早々に退社することにした。
帰宅ついでに、近所のではなく、少し離れたところにある輸入食材も多く扱うスーパーマーケットに足を伸ばす。紅茶の葉が少なくなっていたので適当に気に入ったものを選び、それに合いそうなお菓子を選ぶ。基本的に身の回りのことにあまりお金を使わない涼子にとって、これが唯一と言ってよい贅沢であった。というよりも、趣味の画材にどうしてもお金がかかってしまうため、他にあまり使う気になれないというのも事実ではあったが、少し前まではあまりファッションや娯楽に興味がなかったのが、最も大きな理由である。
（それがピアスのことで話題にされたり『女らしい』なんて言葉までもらえるようになるとは…）
自分らしくない、と、気恥ずかしさに涼子は一人頬を赤らめる。会社や知人の前ではポーカーフェイスを貫き通している涼子であったが、こんな知り合いのいない場所でまで気を遣う必要もない。そもそも四六時中気を張っていてはどこかで早々にボロを出してしまうに違いない。だから彼女は必要以上に無理をすることはしなかった。

（そもそも、これは私にとって、相当な幸運なんだもの。嫌がってたらバチが当たるんじゃないかしら）

日の暮れかけた道を歩き、自宅に帰り着く。近所からおいしそうなカレーの匂いが漂っていた。そういえば夕飯のことは何も考えていなかったなと涼子は思う。

シャワーでざっと汗を流して楽な部屋着に着替えると、買ってきたばかりの紅茶を淹れる。テレビをぼんやり眺めながらほのかに甘いフレーバーを楽しむ。

（そういえば、最近は民放見てることが多いか？）

無意識にチャンネルを変えながらふと涼子は気付く。

（変わった…んだろうか？）

趣味や思考が変わったとは思わない。だが今まで自分のことだけで手一杯だったのが、少なくとも、無意識に彼のことを考えている。テレビでドラマや映画の情報が流れていたら無意識に注目しているし、街を歩いていて彼の広告やＣＭ看板があれば自然と目を向けている。本屋に行けば雑誌コーナーでついつい表紙が誰かをチェックしてしまう。彼がドラマや舞台に出演すると聞けば、原作本や関連情報をついつい仕入れてしまっている。

それがなぜなのか、改めて考えなくても涼子には分かっている。今まで知らなかった彼――ＭＡＣＨＩのことを、少しでもたくさん知りたい。それだけの単純なことで、そうして知っていく彼のことを、少しずつ愛おしく思っていく。毎日会えるわけではない彼のことを想い、そうして会えた時に自分は彼のことが好きなのだと改めて自覚する。益々好きになっていく。

（恋をするときれいになるとか、惚れた方が負けだとか、なんじゃそりゃって思ってたけど――）

一人で頬を赤らめて、耐え切れなくなり、両手で両頬を押さえながら、ベッドに倒れこむ。

羽根涼子は自分で自分のことを平凡な人間だと自覚している。容姿は悪いとまでは思わないが、人より良いというわけでもない。多

少ふくよかな体型をしていると認識しているが、それも並程度の範疇であろう。多少趣味に没入する傾向はあるが、日常生活まで犠牲にはしていない。学校の成績だって、美術が好きでそれに関してはしばしば高評価をもらうこともあったが、それとて自分の好きで、得意にしたいと思う事だからこその努力の結果であり、他の教科はやはりそこそこ。普通に大学を出て、就職した。就職先については、少し自分でもがんばったと思える結果で、その努力だけは今までの人生で自信を持って誇れることだと思っていた。――少なくとも、1年ほど前、ＭＡＣＨＩこと那智知明に出会うまでは。

最初に自宅前で行き倒れている男性の姿を見たときは、何もせず見捨てるか、いっそ警察に通報した方がいいだろうかと考えた。しかし街路灯に照らされた男性の顔を見て、それがテレビや雑誌で散々騒がれている人物だと気が付いた時には、何かの間違いか夢か自分の記憶違いかと散々悩んだものである。

彼女は秘書などという仕事柄、他人の名前と顔を覚えることには自信があった。しかしそれとて現実に出会いうる、仕事関係の、つまりは一般人相手でのことであり、さすがに芸能人などという直接面識のない人間では勘が鈍るのだろうかなどとも思った。しかしいかに見直しても、こんな並外れて端整な顔立ちの男性がそこらにごろごろ存在しているわけもないと思えた。

結局、いくら夏とはいえ薄着の人間が屋外で寝ていれば体に悪い。最悪凍死する可能性もある。とりあえず目が覚めるまでは家に入れるのが人情であろうと、涼子は判断したのであった。

そのことがきっかけで、羽根涼子は那智知明という人物と知り合うことになったのである。

（さすがにそれがこういうことになるとまでは思わなかったけど――）

だから、彼女は今でも不思議なのである。なぜ、那智知明が自分を気に入ってくれたのか。女性の扱いに物慣れている彼の様子から

して、多少の彼の過去の行状には察しがついているものの、少なくとも羽根涼子を口説き始めた頃から現在まで、涼子が自分以外の女性の存在を彼の周辺に感じることはなく、従って不安や不審を感じたことは、今まで一度もなかった。知明は少なくとも涼子に対してはいつも誠実で、情熱的であった。だからこそ、涼子も彼に対して真面目に向き合い、そしてその想いを受けとめることに決めたのである。

（だから、やっぱり、私はすごい幸運に巡り会っちゃったってことなんだろうなあ）

運が良かったのだ、と涼子は思っている。そして今も幸運が続いている、と思っている。そしてだからこそ、

（この幸運は謙虚に、大切に、するべきなんだろうなあ）

そう、羽根涼子は本気でそう思っていた。

4

ＭＡＣＨＩの出演する舞台、『ウンディーネ』の稽古は公演日も迫り、佳境に入っていた。それまでは出演者それぞれのスケジュールがなかなか合わず、個別練習が多かったが、さすがに無理にでも日程をすり合わせて通し稽古が行われ、当日まで完成度を上げるための稽古が連日行われるようになった。

芸能界ではそれなりに知名度のあるＭＡＣＨＩではあったが、本格的に芝居を始めたのはここ１年ほどのことであり、役者としてはまだまだ駆け出しという扱いをされるのは仕方のないことであった。

ＭＡＣＨＩ自身も、自分の力量不足は自覚しているところであったから、熱心に稽古に励んでいた。監督や先輩俳優たちに教えを乞い、時には自分の解釈も主張し、更に修正をかける。彼にとって、主役でこそないが、それなりに重要な役どころを与えられたこの舞台は、自身の今後の俳優人生においてのターニングポイントになるであろうことは予想できた。だからこそ余計に、手を抜くことは一切なく、全力でこの芝居にかけていた。

（――涼子サンにも、見てもらうしな）

稽古の合間の休憩時間、疲れた体をソファに横たえていたＭＡＣＨＩの脳裏に、ふっと羽根涼子の姿が過ぎる。正直な話、仕事中は彼女のことを考えることはない。いや、今は考えている余裕がないというのが最も正確なところである。だからこんなふうに休憩時間とはいえ、彼女のことを考えるのは、最近の彼にしては珍しいことであった。

涼子には既にチケットを渡していた。彼としては公演初日に見てもらいたいのは山々であったが、さすがに勤め人の彼女に平日昼からの公演に来てもらうわけにはいかず、公演期間の最初の土曜日に、彼女は来ることになっていた。

彼が涼子にチケットを渡した時、涼子は最初恐縮していたが、「

こういう舞台って見るの初めて」と、割合素直にチケットを受け取ってくれた。
「がんばってね」
そう言ってにっこり笑ってくれた彼女に、無様な姿を見せることは、やはり好ましくない。そう思ったところでＭＡＣＨＩは目を開け、体を起こした。
（顔洗ってきて、もう一度動き確認しとくか…）
適当な鼻歌を歌いながら廊下を歩いているＭＡＣＨＩを、呼び止める声があった。振り返ると、廊下の向こうから、やはり稽古着であるジャージ姿の若い女性が近付いてきていた。今回の舞台の主演女優である、三枝ユミであった。
「まだ休憩中でしょ？お茶でも飲みにいきません？」
追い付いたユミが彼の腕に手をかけて笑いかける。彼女はＭＡＣＨＩよりいくらか年下のはずであったが、子役から芸暦を積み重ねてきている彼女は、この世界ではＭＡＣＨＩよりもずっと地位は上であった。そんな彼女が気さくに声をかけてきてくれている。それは恐らく大変名誉なことであろうとＭＡＣＨＩは思った。しかし彼はその端正な顔に礼儀正しい会釈を浮かべて、失礼にならない程度にそっと腕を引く。
「すみません、三枝さん。俺、次の稽古までにもう一度確認しときたいことがあるんで…失礼します」
軽く頭を下げると、彼はそのまま廊下を少し歩いて男子トイレに入った。手洗い場で冷たい水で顔を洗う。再び廊下に出たときには、見える限りの廊下には誰の姿もなかった。

＊＊＊

いつものように目を覚ましてシャワーを浴びる。早朝の冷たい空

気をうつした冷たい水が、眠気の残滓を文字通り頭の天辺から吹き飛ばしていく。
ここ連日、絵を描くのに夢中で睡眠時間を相当削っていた涼子は、そろそろ日中辛くなっていることを自覚していた。
（でも、もうちょっと、もうちょっとでなんか掴めそうなんだよな……一向につかめないけど）
いずれにせよ、会社勤めをしている以上、業務に支障が出るのは彼女の本意に沿わない。加えてお盆明けに開催されるフェアーに会社の新製品を展示することになっていて、秘書課含め会社全体が今現在超多忙な時期に突入していた。ぼんやりしていてミスでもしようものなら、どこにどんな支障が発生するかわかったものではない。気を引き締めなければ、と涼子は水ですっかり冷えた自分の頬を軽く叩いた。
いつも通りに朝食を仕掛け、いつも通りにテレビを点けて着替えを取り出しにクローゼットに向かう。そんな彼女の背後で、テレビの音声が涼子の聴覚を惹き付ける。
クローゼットの扉に手をかけたまま、涼子が顔だけをテレビに向ける。いつもより少し早めの時間を示すテレビからは、普段見ない芸能ニュースが流れていた。
『…で、主演の三枝ユミさん、風間駿介さん、藤本章一さん、ＭＡＣＨＩさんが登場し…』
若い女性アナウンサーの声にかぶせて、軽く上下にぶれる横スクロールで、数人の男女が順に映し出される映像が流れる。我知らずどきりとなった胸を無意識に押さえながら、涼子は体ごとテレビに向かう。
ここしばらく、知明とは会っていなかった。涼子の方も仕事が忙しくて、まともな時間に帰宅できていなかったし、知明の方も忙しくて時間が取れない、と謝罪のメールが何本か入っていた。だから、一方的とはいえ、涼子にとっては久々の知明との邂逅であった。
（そう言えば、もうすぐ公演初日か…てことは、今週末？あれ、忘

れちゃ駄目じゃん……）

ちらりと壁のカレンダーを見ると、今週ではなく、来週末の土曜日に大きな赤丸が書かれていた。言うまでもなく、ＭＡＣＨＩの舞台を観に行く予定日である。

忘れていたわけではないものの、日時があやふやになっていた自分に内心呆れつつ、再び彼女はクローゼットに向かい、夏用スーツのスラックスとノースリーブのカットソーを取り出して着替え始める。

手早く朝食と仕度を済ますと、急いで涼子は家を出た。いつもより少し早い時間だが、今日は昨日最後にまとめた書類が気になっていたため、早めに出社して、提出前にもう一度見直すつもりであった。

時間があるときは乗らずに歩く地下鉄２駅分の道のりだが、少しでも時間節約のため、素直に乗り込む。早足で改札に向かう途中、キヨスクの前に積まれた新聞束に目を留め、少し行き過ぎて、どくんと高鳴る心臓の音と同時に勢いよく振り返った。

梱包の隙間から覗いていたスポーツ新聞の一面に見える、見間違いようもない顔と目立つことだけが目的のような品のない書体が、彼女の無意識を惹いて、足を止めたのである。

「ねつあい？……」

漢字書体をひらがなで読んで、自分自身の声に涼子はふと我に返った。そして慌てて踵を返すと、改札を通り抜けた。

「羽根ちゃん、大丈夫？」

午後２時を過ぎた頃、涼子のデスクにそっと寄って来た影が机に突っ伏さんばかりに一心不乱に書類を読み下している涼子に声をかける。

「え？…あ、はい！？苫野さん？何か御用でしたか？」

勢いよく顔を上げた涼子が、デスク脇に立っている苫野麻希子の

姿を認めて、腰を浮かす。
「ああ、いや、用ってわけじゃないんだけど」
苦笑しながら苫野が宥めるように軽く手を振る。
「昨日も今日も羽根ちゃん、コンビニ一人ランチだったでしょう？朝から晩まで根詰めすぎな感じしたからさ」
苫野のにこにこ笑う表情は、相対する者を安心させる魅力があった。涼子もその笑顔についつい詰めていた息を大きく吐き出していた。
「いえ…ちょっと」
口から出たのはあまり意味のない言葉で、浮かんだ表情は苦笑に近かったが、何となく重いものが一つ取れたような感覚を、涼子は感じていた。
「区切りがよければ、コーヒーでも飲まない？私喉渇いちゃってて」
「あ、はい、じゃあ、先に行っててくださいますか？5分もすれば区切りつきますんで」
「ん、じゃあ、先行ってるね」
再びにこりと笑った苫野が廊下に出て行く後姿を見送って、涼子は再び書類の束に目を落とした。
約束通り、5分を過ぎた頃に羽根涼子が給湯室に姿を現わした。苫野麻希子は笑いかけながら、サーバーからカップにコーヒーを注ぐと、目の前まで来た涼子に差し出す。礼を言って受け取った涼子が一口含んで、軽く眉を顰めた。
「う～～なんか、効きますね…」
「…なんか、煮詰まってんのかもね？」
今日のお茶当番誰ですか、などとぶつぶつ呟きながらも、涼子は捨てようとはせず、普段はあまり入れない粉ミルクに手を伸ばす。一さじ入れてかき回し、濃い褐色になったコーヒーを再び口に含んで、何ともいえない表情をした。
「…くどくなってない？」
苫野は自分のカップを示しながら、苦笑した。ちらりと涼子がその

手元を覗き込み、同じような色をした液体がそこにあるのを見て、ふっと噴出した。
「目覚ましにはなりますかねえ」
「強烈ではあるわね～」
ひそひそと囁きあいながら二人は笑う。笑い合いながら、苫野はそっと涼子の表情を確認する。やはり心なしか顔色が悪いな、と彼女は思った。
「ここんとこ、忙しいねえ。疲れてない？羽根ちゃん」
苫野の言葉に、涼子は困ったような表情になる。
「いやあ、…これは半分自業自得なんで…寝不足なんですよ」
心配かけてすみません、と涼子は頭を下げた。
「まあ、仕事はちゃんと片付けてるから、その辺はさすがだなあと思ってるけどね」
苫野もどう言ったらよいものか、考えつつ言葉を選ぶ。
「まあ、今日が終わればとりあえず明日は金曜日で、土曜日午前中の出張が済めば後は休みですし。もうひとがんばりしますよ」
涼子が片手でガッツポーズを作りながら言う。そう言われてしまっては苫野もそれ以上何も言うことはできなかった。
「まあ、ほどほどに休憩取りなね？羽根ちゃん根詰めやすいから」
選びに選んだ末の苫野の言葉に、涼子は気をつけます、と答えて、微笑んだ。しかしその表情はやはりどことなく顔色が悪いように、苫野には思えた。

苦いコーヒーを飲み終え、苫野と時間差で席に戻った涼子は、机の下に置いているハンドバックの中で明滅する携帯メール受信合図のランプに気が付いた。仕事を再開する前に確認しておくか、と開くと、届いていたのは知明からのものであった。反射的にどくりとなる心臓には気付かない振りをして、涼子はメールの内容を表示する。

『今日は遅くなる？晩飯食べに来ないか？』
「…食べに来い？作りに来いじゃなくて？」
誰にも聞こえない程度の声で呟いてから、くすりと彼女は笑った。少し考えてから、返信メールを打ち込む。
『分からないけど、行けそうだったら改めて連絡する。ごめんね』
手早くそれだけ返信すると、携帯を再びバッグにしまいこむ。
ただそれだけの作業で、不思議と心が一つ軽くなったような感覚を、涼子は感じていた。

結局その日、涼子が会社を出たのは１０時を少し過ぎた頃であった。
（行けそうだったら……？）
会社から彼女の家までは地下鉄で２駅分。歩いたってたかが知れた距離である。一方、知明の家は反対方向に５駅ほど。いかに都内とはいえ、この時間ではいろいろ不便だし危険でもある。
（今から行ったって何ができるわけでなし…）
明日も涼子は朝から会社だし、知明とてオフではないはず。それ以前に、公演が迫っている知明が、オンオフ関係なく芝居のことしか考えていないことを、涼子は知っていた。
しかし気が付くと、涼子は自宅とは反対方向の地下鉄に乗っていた。
「……顔、見るだけなら、ね……」
自分の顔が映る地下鉄のドアに向かって、ぽつりと呟く。
駅を出て５分ほど歩くと、上品な高層マンションが立ち並ぶエリアに入り、辺りは信じられないほど静まり返る。ヒールの音を響かせながら早足で歩く。バレッタで留めた髪が不意にきつい感じがして、無造作に外して頭を振る。一日中バレッタで留めていた髪には変な癖が付いていてぼさぼさになっているであろうことは、鏡を見なくても彼女には分かっていた。

（また、ストパーかけに行こうかなあ……）
思いながら角を曲がると、いきなり数人の人が暗闇の中に立っているのに気が付いた。
（…カメラマン？）
驚いて立ち止まった彼女は、マンションの前にたむろしている人たちが揃ってカメラを手にしているのに気が付いた。
そのマンションは知明が住んでいるマンションで、ＭＡＣＨＩ以外にも芸能人や有名人が住んでいることで有名なマンションであった。だからそういった人種が集まっていても何の不思議はない。そもそも普通に平凡なＯＬスタイルの自分が入って行ったって彼らの気を引くわけもない。一つ息を吸うと、彼らの間をすり抜け、涼子はマンションに入った。案の定、誰に声をかけられることも、注目されることもなかった。
ちょうど出てきた人がいたので、それと入れ違いにロビーへ入る。下りたままになっていたエレベーターに乗り込んで扉が閉まると、涼子は大きく息を吐いた。
（自意識過剰だろ、私…）
そんな自分自身を哂いながら、目的の階で止まったエレベーターを降りる。何となく足音を潜ませながら廊下を歩む。角を曲がってすぐに見えるのが知明の部屋。その角で、涼子の足が止まる。
角の向こうから、ドアの開く音が聞こえる。位置関係から、知明の部屋だと察しがつく。そして聞こえるのは、間違いようもなく、若い女性の声――
無意識に廊下の角に身を隠しながら、そっと涼子は廊下の向こうをのぞく。開いたままの扉をおさえる手だけが見える。細くてしなやかで、薄いパールピンクのマニキュアをした指。女性の腕。何を言っているのかは、室内でしゃべっているためか、はっきり聞こえない。ただ女性の声のテンションが高く、上機嫌に聞こえること。親しそうなしゃべり方をしていること、それだけは何となく伝わる。金縛りにあったように動けない涼子の視線の先で、女性の姿が部屋

から出てくる。服装はさほど華やかではないが、抑えられた光源の下でも、それが美しい女性だと分かる。尚も室内に向かって何かしゃべっている横顔は、離れていてもそれが誰だか、涼子には分かった。

（三枝、ユミ…）

「わぁかったってば〜〜じゃあね、また明日！那智君！」

やっとはっきり聞こえた声を認識すると、涼子は勢いよく踵を返した。無意識にエレベーターを避けて、脇の非常階段を駆け下りる。踊り場を一つ越えて数段降りたところで足を止める。階上の廊下で軽快なヒールの音が近付き、エレベーターの作動音が聞こえる。涼子は無意識に気配を殺しながらその気配を全身で感じ取っていた。エレベーターの扉が閉まる音を聞いてから、涼子は再び足音を殺して階段を下り、エレベーターホールに出る。既に通過して行ったランプを確認してから、涼子は下るボタンを押した。

5

「羽根ちゃんが休み？」
翌日、始業１０分前にかかってきた電話を取った後輩からの報告に、苫野は眉を顰めた。
「はい、どうしても具合が悪いので、午前中休ませてくださいってことです」
「…確かに昨日、顔色相当悪かったけどね…」
苫野は表情を曇らせる。
「羽根が休みだと？」
そんな彼女に秘書課の課長が近付いてくる。
「羽根は明日、営業の林部長と出張だろう。準備はできてるのか？」
苛立たしそうな表情と声で言う課長に、苫野は冷静に応じる。
「書類は昨日の内に全部チェック済み、大まかな打ち合わせも昨日やっておりました。チケットは今日の午前中に届くはずだから、それから届けると言っておりました。林部長に確認しなければ確実なことは言えませんが、大きな予定変更がなければ大丈夫なはずだと言っておりましたが」
秘書課においては羽根涼子の上司にもあたる苫野は、昨日帰宅前に受けていた報告をそのまま課長に伝える。涼子のデスク上に封筒に入れて置かれている書類の束を取り上げると、それを課長に示す。課長は中身をぱらぱらと確認すると、眉を顰めながらも、頷いた。
「まったく、この忙しいのに…」
それでもぶつぶつ呟きながら離れていく課長の後姿を、苫野は困ったような笑顔で見送る。
この忙しい時期に誰か一人でも倒れれば全体に皺寄せが来る。それは事実なのでしょうがないと彼女は思う。ましてや全員が疲労で苛立っている。ここはそっと受け流すしかないことを、苫野は経験上身につけていた。

とりあえず、羽根涼子が来るまで自分がフォローすることにしよう、と苫野は思った。
しかし結局その日、羽根涼子は全日欠勤したのであった。

「羽根ちゃん、こんなとこ住んでんだ」
終業後、苫野は以前知らされていた住所を頼りに羽根涼子の家を訪ねていた。街灯に照らされた、見るからに築年数が相当経っていそうな、古いタイプの3階建てアパート。その1階の一番奥が涼子の家のはずだった。
結局会社に来れなかった涼子だったが、業務にはさほどの支障はなかった。恐らく週明けからは皺寄せが来て大変だろうが、当面問題はなさそうだった。課長は不機嫌そうだったが、電話口で相当変わった涼子の声を聞いていたため、表立って文句も言えないようであった。
インターフォンを押すと、室内でチャイムが鳴っているのが聞こえる。ドア脇のサッシは暗いままだったが、表から見たときには確かに明かりが点いていたのを確認していたため、苫野は涼子の在室を確信していた。しかしなかなか返答がない。もう一度インターフォンを鳴らすが、やはり反応がない。
（……まさか、倒れてないよね…）
普段ならしつこい、おせっかい、と思って引き下がるところだが、今日に限って、苫野はここで帰る気にはなれなかった。実際、明日必要なはずの書類を持って来ている以上、直接手渡ししなければ意味がないのも事実であった。
携帯電話を鳴らすと、室内から着信音が聞こえた。そしてようやく、人間の動く気配がドアに近付いてきた。
「苫野さん…」
ドアを開けた涼子が掠れた声で目を丸くする。涼子はやはり寝ていたらしく、髪の毛がくしゃくしゃで足取りもおぼつかなかった。

「悪いね、起こして。でもこれ、渡しとかなきゃと思って」
苫野が封筒を渡すと、涼子が中を確認して頭を下げる。
「すいません、ご迷惑おかけして…」
「しょうがないよ。風邪引いた？昨日顔色悪かったもんね」
「そうみたいです…薬はもらってきたんですけど。…あれも始まっちゃったから、吐き気はするわ何わで……ちょっと、一日動けませんでした…」
苦笑する涼子だが、その表情にも精気が大幅に欠けている。苫野は表情を曇らせながら、涼子の額に手を当てる。熱はないようだったが、顔色の悪さを見ると、貧血くらいは起こしているのかもしれなかった。
「あ…すいません、こんなとこで立ったまま…お茶くらいなら出せますけど」
不意に気付いたように涼子が言うが、苫野は頭を振った。
「いいよ、様子見ついでにそれ渡しに来ただけだもの。明日は大丈夫そう？」
「はい、それは大丈夫です。一日体力温存しましたから。多分明日には気分悪いのは治まるはずなんで」
弱々しいながらも涼子ははっきり頷いた。自分で言ったことはきちんと実行する涼子のこと、多分大丈夫だろうと苫野は思った。
「…わかった。でも一応、明日、朝電話するわ。８時頃。それでいいね？」
有無を言わさない迫力の苫野に、涼子は苦笑いしながらではあったが、頷いた。

＊＊＊

『ウンディーネ』の公演が始まった。

初演の評価はまあまあで、これが初舞台であるＭＡＣＨＩこと那智知明は、気が抜けないながらも少しだけ詰めていた息が吐けるような気がしていた。
そうして少し気持ちに余裕ができると、ここしばらく会うことのできないでいる羽根涼子のことが気になった。
直接電話で話したのは１週間は前になるか。涼子は元々あまり電話をかけてくることのない人だったが、知明が忙しくなった頃からは、メールもあまり来なくなっていた。同じ頃に涼子の仕事も忙しくなり、連日ハードなスケジュールに振り回されているということもその電話の時に聞いていたので、おそらく気持ちに余裕がないのだろうと思い、知明からの連絡も控えてはいた。
（でもよく考えたら１週間以上も会えてないってのは――）
時間を認識すると急に欲求が募る。会いたいと思うときに目の前にいてくれない彼女に、無性に腹が立つ。もちろんそれは、勝手な、一方的なわがままだということは認識している。それでも思ってしまうことは止めようがない。
（この間だって結局来れなかったしな…）
会いたい、突発的に思ってメールを打つ。しかしその返答はなかなか返ってこなかった。
「記者会見の時間です」
携帯電話を見つめてじりじりしながら待っている間に、楽屋に迎えが来た。知明は納得できない気分だったが、楽屋を出る。気持ちを切り替えようとぶるぶると首を振ってみる。
舞台前の廊下でマスコミ各社の記者に囲まれて受ける簡易的な記者会見が始まる。
「ＭＡＣＨＩさんはこれが初めての舞台での芝居ということになりますが、いかがですか」
「三枝さんの役は周囲の男性を魅了して破滅させる役どころですが、役作りで悩まれたことなどはありませんか」
一通り芝居についての質問が終わると、周囲にじわじわと緊張感

が漂い始める。
来たな、と知明は内心身構えた。
「今回三枝さんのウンディーネは周囲の男性すべてを虜にされてるわけですが――」
記者の山の中から妙に甲高い男の声が上がる。小太りな中年の男性記者が片手を挙げながら知明たちを――正確には、三枝ユミを、見つめながら言葉を続ける。
「――今回、共演者の皆さんとはいかがでしたか？」
聞いた瞬間、周囲の緊張感は高まり、反対に知明たち出演俳優たちの間には苦笑が漏れる。
（スタッフは神経質すぎるけど――）
そちらを見なくても、この群の外側に控えている自分のマネージャー辺りは鬼の形相になっているに違いないと知明には確信できた。
（こいつらもレベル低すぎだ）
知明の内心は冷め切っていた。こんなに意味のない質問もないだろう、そう彼は思うのに、ワイドショーや雑誌に取り上げられるのはこういった部分ばかりなのだろう。今までの経験から、彼はそう確信する。くだらない、と思う。
ちらりと隣に立つ藤本を見ると、彼は完璧な微笑を湛えた表情だった。反対側に視線をやると、頭ひとつ分くらい小さな位置で、三枝ユミがにこにこと愛想のよい笑顔を周囲に満遍なく向けていた。
「ええ、共演者の皆さんとてもいいかたばかりで…稽古の間もとてもみんな仲良かったんですよぉ。だから、どなたも、大好きですねぇ」
かわいらしい声で、語尾に多少の甘えを乗せることを忘れない。これぞ完璧な女優のしゃべり方だな、と知明は思う。
「じゃあ、プライベートでもどなたかと遊びに行ったりとかしていたんですかぁ？」
輪の外で殺気立った気配が動いたのを知明は感じた。しかしその前に、隣の三枝ユミが反応していた。あははは、と甲高い声で笑う

と、困ったように眉を寄せて、口で笑う。
「そんな時間はありませんけどぉ、稽古の後にご飯食べに行ったりとかはしましたね。風間さんがおいしいお店たくさん知ってらっしゃったので…」
そう言いながら三枝ユミは知明とは反対隣に視線を向けた。三枝ユミの視線を受けて、この舞台のもう一人の主役の風間駿介が会釈する。
「この話では逞しい騎士や美しい貴族の青年など様々な男性が登場するわけですが――」
また別の記者の声が上がる。
「三枝さんなら誰を選びますか？」
途端、ぴりり、と空気が緊張するのを知明は感じた。そっと視線を巡らすと、マネージャーと劇場の担当者が表情を引き攣らせていた。
（そりゃまあ、そうだな。こんな質問されたら――）
「そうですねぇ、皆さんかっこいいから誰か一人といわれても悩みますけど…」
しかし三枝ユミはそんな空気を感じていないのか、間延びしたような声で笑う。
「…やっぱり、美形の貴族さんがいいかな」
その言葉はあまりにも軽く、さりげない風だったが、記者たちにこぞって眼の色を変えさせ、マネージャーはじめ劇場関係者の頬を引き攣らせ、芝居の共演者たちに苦笑を漏らさせるに充分すぎる破壊力を持っていた。
「――はい！お時間です～！みなさん、ありがとうございました～午後の部の準備がおしておりますので、この辺りで会見を終了させていただきたいと思います～！！」
ぱんぱん、と手を叩く音が響き、劇場関係者が声を張り上げた。すかさずマネージャーや劇場スタッフが記者を掻き分け、退場路を確保した。知明は思わず笑いたくなったが、それは内心だけに留め

ておいた。クールで、何事にも動じない、不敵な美青年俳優ＭＡＣＨＩの、超然とした美貌にフラッシュがいくつも向けられる。連続する白光に、ＭＡＣＨＩは僅かに目を眇めた。
この写真はどんな見出しで使われるんだろう。他人事のようにそんなことを考えていた。
戻った楽屋で確認した携帯電話は、やはりまだ沈黙したままであった。

「ウンディーネ」は一日2回公演。夜の公演を終えて知明が一息ついたのは、午後１０時を過ぎてであった。
携帯のメール着信ランプが点滅しているのに気付いてチェックをすると、夕方に涼子からのメールが届いていた。
『今ようやくメールチェックしました。遅くなってごめんね。今最高に忙しいのです。一段落ついたら連絡します。ほんとごめん。お芝居、がんばって』
簡潔な、そして丁寧な拒絶。知明は無言で携帯電話を閉じると、手早く荷物をまとめて楽屋を出た。
大股で歩く彼に誰かが声をかけてきたような気もするが、その時の彼にはあまり認識がなかった。
タクシーで涼子の家の近所まで向かい、大通りで降りる。そこで携帯電話をかけてみた。数回のコールで、電話が繋がった。
「…もしもし」
『もしもし、トモさん？』
普段よりも低く、掠れたようにも聞こえる声が、彼の名を呼んだ。歩く彼の足が速まる。
「涼子サン。今大丈夫？」
『…うん、まあ。どうしたの？』
「今、どこ？家？」
『うん、家だよ。今日は珍しく、９時には帰れた』

くす、と笑う雰囲気が受話器を通して伝わってくる。
『…ああ、それから、メール、ごめんね。最近なかなかチェックする時間なくって』
「……ああ、うん。さっき返事読んだ」
『あ、そうか。あの時間じゃお芝居中だったかな』
タイミング悪いね、と笑う声が続く。いつもと違う掠れた声。ため息のような笑い声。
「――涼子サン」
電波が自分の念を声に乗せてくれないかと願う。
『何？』
「会いたい」
簡潔に伝える要望。そのあまりのストレートさに、涼子の声が詰まる。
『……最近、会えてないもんね』
「うん、だから、会いたい」
ようやく搾り出したような涼子の言葉に、知明は即答する。響く足音を嫌いながら、マンションの外廊下のコンクリの上を進む。
『そんなこと言っても』
苦笑いしながらの声を聞きながら、目的のドアを叩く。軽く、二回。
『…え？あ、誰か…』
「ドア、開けて」
『……ええ？』
恐る恐る、といった風に目の前のドアが開く。室内の柔らかい黄色い光が細く筋状に外の暗闇を照らし、その眩しさに、知明は目を細めた。

6

半信半疑で玄関を開けた涼子は、そこに携帯電話を耳に当てたままの知明が立っているのを見て、固まった。

「――何で？」

ようやく絞り出した声は、彼女自身驚くほど低く掠れていた。喉の奥がいがらっぽい。完全には治っていない風邪のせいに違いない、と涼子は意味のないことを考えていた。

呆然とした表情で自分を見つめるだけの涼子に、不意に知明の苛立ちが爆発した。

携帯電話を切りながら涼子を押し込むように玄関に入る。困ったような表情のまま涼子があとずさる。そのまま後ろ手で玄関を閉めると、無言で涼子に手を伸ばす。

「――――っ！」

両手で彼女の顔を捉え、唇に唇を押し付ける。性急に何度も啄ばみ、角度を変えて強く吸う。

「…～～～！！」

口を塞がれたまま、涼子が何事か叫ぼうとする。喉の奥の震えが唇から伝わる。頬を掴んでいた片手を滑らせ、首筋から後頭部へ廻す。肩を抱くように引き寄せようとすると、両腕が彼の胸を押し、突っ張ろうとする。抵抗を無視して体を引き寄せ、唇の力を緩める。僅かに開こうとする彼女の唇をすかさず舌でなぞり、もう一度しっかりと塞ぐ。抵抗するように力を入れて引き結ばれた唇を、塞いだまま舌で舐める。柔らかい唇は、普段よりもがさがさと荒れていて、メンタームの刺激がした。

胸の間に挟まれていた腕が、彼の肩をぎゅっと掴む。もう一方の腕は肘を折り曲げて腕を彼の胸に当て、その両方の腕で彼の体を押し戻そうと力を入れる。唇が僅かに外れる。

「……はあっ……！」

俯くように顔をそらせ、大きく息を吸う。その表情を追うように、彼が顔を寄せる。とっさに反発しようとした彼女の踵が、玄関の段差にぶつかる。ぐらりと体制が崩れる彼女の腰に、彼がとっさに腕を廻す。そのまま勢いを殺しながら、二人の体が床に倒れこむ。

押し倒したような体勢になって、知明が固まる。冷たく硬いフローリングの感触が、彼の理性を少しだけ覚まさせる。

床に倒れ込んだ衝撃は、知明の腕が支えてくれたおかげでほとんど受けなかった。自分を押し倒したまま固まっている知明に、涼子は反射的に手を振り上げ、その頬を叩いた。

頬を打つ鈍い衝撃に、知明の意識が、今度こそはっきりする。はっとして見下ろす涼子の目尻には、微かに涙が滲んでいた。

「涼子サ…」

「ばか！！」

怒鳴られて、知明は言葉を失う。

「いきなりなにすんのよ、あんたは！」

一息に怒鳴ると、涼子が咳き込む。知明は慌てて体を起こしながら、涼子の体を抱き上げようとする。咳き込みながら、涼子が体を起こす。あまり激しく咳き込みすぎて、きつく瞑った涼子の目元に涙が浮かんでいる。

知明はしばらく戸惑ったように目の前で咳き込んでいる涼子を見つめていたが、おもむろにその体を引き寄せ、抱きしめた。今度は優しく、ただじっと。

「…風邪、引いてるって言ってませんでしたっけ？」

ようやく咳の治まった涼子の、こもった声が聞こえる。不機嫌そうではあったが、怒ってはいないと知明は思った。

「…うん、聞いてた」

「…メール、返事読んでます？」

「……うん、読んでる」

知明が涼子の肩に頭を乗せた。背中には大きな温かい掌の感触。首

筋に当たる暖かい肌の感触と、時折偶然を装うように当てられる唇の感触。それぞれから感じる自分のものではない熱に、涼子の全身がじんわりとあたたかくなっていくような感覚がした。その感覚にあたたかい気持ちがわいてくるのを感じ、彼女は複雑な表情をした。

知明の肩口に押し付けられた涼子の額から、手に触れる柔らかな体から、頬が触れる首筋から、涼子の熱が伝わってくる。普段より熱い吐息が服地越しに知明の胸をくすぐる。

お互いフローリングの床にペタリと座り込んだまま、知明は脱力しきった涼子の体を抱きしめる。抵抗をしない彼女の様子に、本当に具合が悪いのだな、と知明は思う。そのことに申し訳なく思うのと同時に、同じくらいの彼女に対する苛立ちを感じて、結局知明は何も言わず、ただ涼子を抱きしめる。

（そんなに俺は頼りにならないか？）

風邪を引いても、具合が悪くても、しんどくても、涼子が知明に弱音を吐いたことはない。甘えられたこともない。

（それって一体、付き合っていると言えるのか？）

きっとそう言えば、涼子はこう答えるだろう。

『だって、トモさんに風邪うつすわけにはいかないじゃないですか』

それがどうしたのだ、と思う。確かに知明が体調を崩せば仕事に差し支える。身体が資本の仕事である。しかしそれは涼子とて同じこと。自分と、涼子とに何の違いがあるのか、と知明は思う。

涼子は知明を特別扱いしない。知明の名前を利用することもないし、自慢をすることも、かといって卑屈になることもない。強いて言うなら、あまりにも欲がない。それが、知明には寂しい。

彼女と出会った一年前、知明はひどく荒れていた。

ＭＡＣＨＩとして求められることと、知明として望む自分のあり

方の乖離。多忙さの中で失われる自分という個と、それを感じて何とかしようと、もがく行為のあれこれ、その反動。

何より一番彼を追い詰めたのは、ＭＡＣＨＩに偏執的な愛情をぶつけてきた「ＭＡＣＨＩのファン」の女性の行動であった。

最初はラブレターを送り付けてきたり、仕事先におしかけてきたり、そういった少し過激なファンでしかなかった女性だった。しかしそれが徐々にエスカレートし、一方的に「恋人」や「妻」を名乗り始め、ついには、一般的には全く公表していないはずの彼の自宅にまで押しかけてくるようになった。

それは日を、時間を追うごとにエスカレートし、過激になり、ついには暴力沙汰、刃傷沙汰にまで発展し、彼を追い詰めていった。

ある日、どうしようもなく自暴自棄になった知明が、行方をくらませた。

誰とも連絡を取らず、知り合いのいそうな場所から逃げ出した。自分という存在を消してしまいたい、と思ったのかもしれなかった。しかし結局はどこへ行っても「ＭＡＣＨＩ」から逃れることはできず、あてもなくさまよった挙句、東京へ戻り、力尽きて行き倒れてしまった。

気が付いたとき、彼は見知らぬ部屋のベッドにいた。状況がつかめず、ぼうっとしていた彼は、女性の声に呼ばれて、ようやく意識がはっきりした。

「目が覚めましたか？」

慌てて起き上がった彼は、部屋の入口に立っている女性に気付き、一瞬身体を堅くした。一時的に女性不信、いや、人間不信に陥っていたのかもしれなかった。しかし、そんなことに気付かない女性は、何も答えない知明の様子に首をかしげると、柔らかく微笑んだ。

「起きれるようになったら、こっちへ来てください。食べるものとか用意しときますから」

そう言うと、彼女は扉を閉めて去っていった。薄暗い部屋の中、金縛りの解けたような脱力感に襲われ、知明はベッドに倒れ込んだ。

シンプルで、飾り気のない部屋であったが、適度に崩してある感が、不思議に居心地よかった。心なしか漂う甘い香りは、アロマか何かの残り香だったろうか。感覚を刺激しない、優しいものだった。
次に意識が戻った時は、やはり部屋は薄暗かった。起き上がってテーブルの隣にあったローテーブルを見ると、手紙とキーが置いてあった。
『申し訳ありませんが、仕事に行っています。帰るときは、カギをかけて、ポストに入れておいてください。キッチンに食べ物と飲み物置いてますので、お腹空いてたらどうぞ』
手紙を持って部屋を出ると、灯りがついたままのキッチンに、ラップのかかった皿と、ペットボトルが置かれていた。
彼は不意に、笑いがこみ上げてきた。
壁にもたれた姿勢で床に座り込み、片手で頭を抱えて、笑い続けた。久々に声を出して笑えることに、彼は心から安堵していた。

何がきっかけであったかなど、彼自身にもわからない。
ただ、涼子と接していると、知明は誰といるよりも居心地がよかった。
理由などどうでも良かった。ただ、彼女を側に置いておきたかった。側にいたかった。

「涼子サン」
彼女の首筋に顔を埋めたまま、彼が囁く。
「会いたかったです」
彼女は僅かにくすぐったそうに身動きしただけだった。
「会いたかったんです」
そうして、もう一度、涼子サン、と囁く。
涼子は大きく息を吸い込んだ。それを一旦止めて、目をぎゅうっ

と瞑る。それからゆっくりと腕を持ち上げて、知明から体を離した。
「ありがとう。私も会いたかった。でも」
ゆっくりと涼子の顔が上がる。無垢な瞳がまっすぐ彼を捉え、すぐ下にそらされる。
「今日は、帰ってください…」

＊＊＊

土曜日の昼下がり、涼子は『ウンディーネ』の公演が行われている会場にいた。
知明の用意してくれた席は、前すぎもせず、後ろすぎもせず、とても見やすい位置であった。客層は、やはり若い女性が多かったが、それ以上に、落ち着いた年齢層の男女も多く、総じて舞台に対する期待の高さを感じさせた。

『ウンディーネ』は水の妖精と人間の騎士の悲恋物語である。
ウンディーネは美しい少女の容姿と美しい歌声をもった妖精である。水辺に潜む彼女たちは、その姿と歌声で人間、特に若い男を魅了し、破滅させる。本来魂を持たないウンディーネたちは、人間の魂を奪うことで、自らのものとし、力を得た精霊へと進化する。そのため、本能的に人間を襲うのだと恐れられている。
主人公であるウンディーネも、そんな一人で、これまで何人もの男を虜にしてきた。
ある日、彼女は漁師の男に近付いた。そして彼自身と、その周囲、陸上の生活に興味をもった。そこで、彼女は水の世界を出て人間の生活に入った。そして、漁師の魂を奪った後、地上をあちこちさまようことになった。
人の魂を奪い、地上を流離う旅の末、ある土地に辿り着いたウンデ

ィーネは、その土地の貴族の息子に求愛されることになった。興味を持って彼に近付くウンディーネ。しかし彼女は貴族の息子の護衛である、とある騎士に、激しい恋心を抱くことになってしまう。そうして彼女は、ウンディーネの罪深い性に気付き、打ちのめされる。ウンディーネは男の魂を奪う。しかしそれは誰でもよいのではなく、自分が気に入った相手、より深く愛した男の魂を奪う性を持っていたのである。
騎士を愛する心と同等に、彼の魂を奪うことを激しく欲している己の本能との相克。自分を切ないほどに愛する貴族の息子の一途さを愛おしく思う心。その狭間で悩み、苦しむウンディーネ。
結局、ウンディーネは貴族の息子の魂も騎士の魂も奪い、水の世界へ戻る。水に戻ったウンディーネは地上での全てを忘れ、水へと溶け込んでゆくが、唯一消せなかった騎士への愛するが故の苦しみの心だけは消えず、永遠に水に漂い苦しむこととなる。

マンションでの出来事を目撃した後、涼子は少し三枝ユミのことを調べた。――といっても、特に調べようとしなくても、マスコミが一斉に書き立てた三枝ユミとＭＡＣＨＩの「熱愛報道」によって、大体のことは労せず耳に入ってきていたのだが。

三枝ユミは、若いながら、演技力の高さに定評のある女優である。活動は主に舞台であり、テレビにはあまり出演しない。しかしある意味、テレビや雑誌などによく登場する名前であった。
東南アジア系の風貌で、一見お嬢様風の美人である彼女は、しかし舞台上と普段の印象が相当違うらしい。いわゆる「不思議系」で、恋多き女性なのである。
今までも芝居の共演者と噂になることが度々あった。そして、そのたびにのらくらと周囲を煙に巻いているということであった。

舞台上のウンディーネ――三枝ユミは、本当に美しかった。
無垢な振る舞いも、恋を知り、愛する人を破滅させる己に苦悩する姿も、絶望して心を壊した表情も、全てこの上なく美しく、魅力的だと、涼子は思った。同性にもかかわらず、見惚れて引き込まれてしまうような姿であった。

別に、涼子は三枝ユミと己を比較しているつもりはなかった。しかし、舞台上で三枝ユミのウンディーネとＭＡＣＨＩの貴族の息子が並び立つ姿は、いかにも美男美女で、見栄えがした。涼子にこだわる要素が何もなければ、きっと普通に眼福を喜んでいただろう。
一方で、自分は平凡で、やはり彼――知明に吊り合っているようには、やはり涼子には思えないのである。
かといって、涼子はＭＡＣＨＩ――那智知明と、三枝ユミが本当にどうにかなっているとまでは、思ってはいなかった。と言っても、その後ほとんど連絡も取ってはいないし、知明からも話題にしてこないので、涼子からも話題にはしていない。だから、本当のところはわからない、というのが涼子にとって最も正確な認識であった。
全ては「勘」でしかない。それも、きっと、今の精神状態の原因なのだろう、と涼子は思う。
こういうときどうすればいいのか、涼子にはわからなかった。

7

その日もコンビニで買ってきたパンを一人自分のデスクで食べようとしていた涼子は、隣に人が立ったのに気付いて顔を上げた。
「隣、いい？」
白いビニール袋を捧げて笑いかけてきていたのは、苫野麻希子であった。
「苫野さんも今日はコンビニ弁当ですか？」
涼子が頷きながら答えると、苫野はやれやれといった風に肩を竦めながら、笑った。
「今週いっぱいは無理だね～」
言いながら、苫野は涼子の隣席の椅子を引いて来て、座った。
しばらく愚痴とも世間話ともつかない話をして、ふと会話が途切れたとき、苫野が急に表情を改めた。
「ねえ、羽根ちゃん、まだ顔色悪いね。まだ具合悪い？」
いきなりの問いに、涼子は自分自身驚くほどに動揺した。
「…大丈夫ですよ。熱っぽいのも、喉が痛いのも殆ど治りましたし」
微笑んで答える涼子を、苫野はしばらく無言で見つめていた。
「ねえ、羽根ちゃん、おせっかいだとは分かってるんだけど――」
苫野はとても言いにくそうに少し口ごもったが、振り切ったように続けた。
「何か、悩みでもあるの？」
「…何で、そんなこと言うんですか？」
「いや、ただの『女の勘』、てやつなんだけどね」
苫野は穏やかに笑っていた。それはいつもの彼女の他人を安心させる笑顔であった。しかし、涼子は困っていた。彼女に、今の時点で答えられることなど何もなかった。しかし、そのときの涼子は、何かを言ってしまいたい衝動に、不意に襲われていた。
だから、そのとき彼女は、本当に、無意識のままであった

「ねえ、苫野さん。苫野さんは、高嶺の花だ、と思う人に出会ったこと、ありますか？」

突然の問いかけに、苫野は戸惑った。何よりあまり耳慣れない単語に、とっさに反応に困ってしまった。

一方、涼子も驚いていた。自分は一体何を言っているのか。言った瞬間から、恐ろしく狼狽していた。

「ごめんなさい！今のなしです！忘れてください！」

私、何言ってるんだろ～、などと呟きながらすっかり挙動不審になっている涼子をしばらく見つめてから、苫野はようやくくすりと穏やかな笑顔を取り戻した。

「そうだね、多分、答えにはならないけど…」

ゆっくり、涼子を落ち着かせるような表情と声音で、苫野は続ける。

「羽根ちゃんは、もうちょっとわがままになっていいと思うな。もうちょっと、言いたいこと言っていいと思うよ。

羽根ちゃんは、何でも内にため込んじゃってる気がする。そういう控え目で思慮深いところも羽根ちゃんの長所だと思うから、それはそれでいいんだけどさ。あんまりそればっかだと、羽根ちゃん壊れるよ」

そうなったら、私は悲しい。そう言って、苫野は笑った。

＊＊＊

舞台の合間の休日、例の如く昼まで怠惰に転がっていた知明の部屋に、来客があった。

「…なんだ、マネージャーか」

「なんだじゃありません、いくら休みだからと言って、一日寝てる気ですか？」
合い鍵で勝手に入ってきたマネージャーの加々見恭介に叩き起こされた知明が不機嫌そうに唸る。そんな彼に呆れ顔を見せながら、加々見はコンビニの袋をリビングのローテーブルに置いた。
「どうせまた、ろくなもの食べてないでしょう？適当に買ってきましたから、食べてください」
言い置いてキッチンに向かった加々見がグラスを二つ持って戻ってくる。知明はソファに座ってタバコをくわえながら、ぼんやりとそちらに視線を遣っていた。
コンビニ袋から出てきた2リットルペットボトルから注がれたお茶を受け取り、無意識のまま一口すする。どことなくケミカルな味が舌に残り、知明は僅かに眉を顰めた。
「…で？わざわざうちまで来て、何？マネージャー」
知明が促すと、正面のソファに座ってお茶を飲んでいた加々見が頷いた。
「はい、まあ、例の雑誌の件です」
加々見の口から予想通りの答が返ってきて、知明はソファの背もたれに頭を乗せて、天井を見た。口にくわえた煙草にまだ火を点けていなかったのに気付き、手探りでライターを取って、火を点ける。
「三枝さんの事務所とも話しました。結論としては、『このままほうっておく』ということになりそうです」
「…それは、決定？」
「多分…別に、際どいところをおさえられたわけじゃありませんし、形としては、一方的にマスコミが騒いでいるだけですから。三枝さんの方はいつものことですから、適当にあしらうとおっしゃってるようです。こちらとしても、変に騒いだりコメント出したりしたら、変に煽っちゃうことになりそうですしね」
「……際どいも何も、実際に何もないのに写真が撮れるわけもないだろう…」

知明が天井を見上げながら煙草をふかす。もわもわと上がる煙が天井に触れる辺りで空気に溶け込んでいく。いつもよりも苦い気のする味に、知明は目を細める。
「まあ、マンションに来られたのは痛かったですね…多分、三枝さんとしては確信犯でしょう？」
加々見が不機嫌そうな表情で呟く。グラスのお茶は飲み干して、2杯目を注いでいる。何を考えているんだか、と呟く声が聞こえて、知明は少しだけ顔を起こして加々見の方に視線を遣った。
「多分なあ…三枝さん、別に本気じゃないと思うぜ。少なくとも、俺にちょっかいかけてんのは、本気じゃないと思う。ていうか、俺じゃないんじゃないかなあ、目的は」
「……スケープゴートだとかいうことですか？」
加々見の答えに、知明は答えなかった。しかしこの場合沈黙は肯定と同義だと加々見は認識した。
「…なんとゆーめいわくな。しかしそれなら何もＭＡＣＨＩさん狙わなくていいじゃないですか。うちのここ1年の事情、あちらさんだって知らないわけじゃないでしょうに」
加々見のぼやきには知明も全面的に同意する。しかし恐らく、この場合、適任だったのは自分しかいなかったのだろうとも彼は思っている。

今回の芝居では、三枝ユミの相手役である若い俳優は、主要な役どころでは、風間駿介、藤本章一、そしてＭＡＣＨＩこと知明自身の3人となる。その内、藤本は既婚者でしかもまだ新婚で、連日仲の良さが漏れ伝わってきている。風間は大変真面目で神経質な性格で、潔癖症でもあった。こういったスキャンダルがらみに巻き込まれれば不快に思うだろうし、反対にこういったスキャンダルのダミーを引き受けたりしたら、それはそれで本気を疑われて余計な混乱と報道の過熱を生んでしまっただろう。かといって他のあまり主要な役どころにはない俳優を持ってくるには、三枝ユミの側も不釣合

いだと感じて、避けたいところだろう。
つまり、今回の芝居メンバーの中では、ＭＡＣＨＩが最もこういった類の問題に引き込みやすかった、と。そういうことだったのであろう。
だからと言って、それを光栄に思うわけもなければ、余裕で受け流すということも、現在のＭＡＣＨＩには難しかった。

元ファンのストーカー行為の問題が治まったのは、つい数ヶ月前のことである。嫌な思いをさせられたとはいえ、元々自分を応援していてくれていた人物を、自分の手で警察や司法に突き出さねばならなかったことは、ＭＡＣＨＩとしても辛いことであった。しかしそれ以上に、対人的な恐怖心、あらぬところから監視されるかもしれないという強迫観念。そういったものから、やっと逃れて平穏を取り戻していた彼にとって、今またあの時の状況に自分を追い込むなどということは、絶対に避けるべきことであった。
そうして思う。
（あの時は、彼女に会えたから――）
「そういえば、あの方とは今でも会ってるんだそうですね」
まるで心の内を読んだかのような加々見の言葉に、知明は思わずむせながら身体を起こした。煙草を灰皿に押し付けながら、息を整える。
「羽根さん、でしたよね。あの時は本当に助かりましたよ」
加々見は思い出したように穏やかな笑顔になる。そんな彼の様子に知明は微妙に複雑な気持になるが、表情にまでは出さず、軽く頷く。
そうして、知明は改めて思い返す。なぜあの時、自分は羽根涼子を拒絶しなかったのか。
初めに目覚めた時は、女性の影を見ただけで、確かに心は拒否反応を示していた。しかしすぐに引き下がった彼女に、拒否反応は少

しのもので治まった。二度目に彼女の姿を見たのは、仕事から帰って来た涼子を、彼女の部屋で出迎えた時。
『あ、目、覚めてたんですね』
キッチンにいる知明を見て少しだけ意外そうな表情をした後、涼子は穏やかに笑った。
当然のこと、知明の身元は知られていて、戻らなくていいんですか？と聞いてきた涼子に、お願いだからしばらくかくまってくれ、などと言ったのは、今思い返しても不可思議だが、考える間もなく飛び出した言葉は、間違いなく知明の本心であり、そのときはそれ以外、知明に採り得る選択肢はなかった。
きっと、それは、彼女が優しかったから。彼女の側にいることで、清潔な空気を吸うことができたから。間違いなく彼女は女性で、その心配りも女性らしかったが、彼女の清潔さが、彼に彼女を女性らしく感じさせなかった。だから、そのとき知明は、とても居心地のよさを感じていたのだろう、そう彼は思っている。

会いたい。
最後に会った時の彼女の表情を思い出す。
俯いていて、結局最後まで直視してくれなかったけど、唇が一文字に引き結ばれていた。頬から顎にかけて、肌の色が透けるように白く見えたのは、今でも鮮やかに思い出される。
抱きしめた身体は、いつものように柔らかかった。むき出しの二の腕と、丸みを帯びた肩。唇で触れた滑らかな首筋には、微かな甘い香水の残り香が漂っていた。
胸に触れた彼女の豊かな胸の感触。――知明個人としては彼女の身体のうちで最も好きな部位の感触を、もっと感じたかったと思っても、それは責められるべきことではないと彼は思う。――涼子にそんなことを言ったらどんな顔をされるかわからないので、素面で、直接言う度胸は、今のところ知明にはないが――

会いたい。
触れたい。
あの声で、名を呼ばれたい。
彼女の淹れてくれたお茶が飲みたい。
彼女が作ってくれたご飯が食べたい。
もう、いっそ、何もしてくれなくてもいい。
側にいて、自分を見守っていてほしい。
振り向いたら、彼女がいて。
そうしたらきっと、自分は彼女に笑いかける。

「…ＭＡＣＨＩさん？」
加々見の声に、知明がはっと顔を上げる。どうやら自分の考えに沈みこんでいたらしいと気付き、知明は妙に狼狽する。
「どうかしましたか？」
どうにも不審な知明の表情と行動に、加々見が怪訝な表情になる。
そんな加々見の視線を見返して、ふと知明は思いついた。そしてその思い付きを彼自身の中で吟味する間もなく、彼は行動に移していた。
「マネージャー、ちょっと話があるんだけど……」

8

『ウンディーネ』の公演も千秋楽を迎えるばかりになっていた。お盆期間を挟んだ公演であったにも関わらず、連日ほぼ満席、各メディアでの評価も上々、というかなり良好な成果を上げていた。それはつまり、この舞台が成功であったことを意味している。

千秋楽前日の公演を終え、楽屋に戻った知明は、とりあえず、窮屈で重い衣装を全て取り去り、椅子に倒れこむように身を投げた。しばらくそうやってぼうっとしていたが、ふと視界の端に映った携帯電話が明滅しているのに気付き、のろのろと腕を伸ばして携帯電話を引き摺り寄せた。疲労で重い指でぎこちなく携帯を操作し、受信メールを読み込む。そうして新着メール一覧に表示された名前の一つを見た途端、知明は椅子に直立不動の姿勢になっていた。疲労で重かったはずの脳も急に働きがクリアになり、慌しく動く指がその差出人のメールを読み込むよう、操作する。

『おつかれさま。
今日、テレビで舞台のことやってたよ。本当に評判いいね。
特にトモさんの貴族の演技、大評判みたい。それ聞いてたら、何だかもう一度見たい気分になっちゃうくらいだったよ。すごいね。
明日で最終日だよね？最後までがんばって！』

相も変わらずの色気も素気もないメール。普通はもう少し、何かあるだろう、恋人に送るメールなら！と知明は少し残念にも思うが、一方で、変わらない彼女のメールに、心がこの上なく浮き立つのを感じていた。
メールの送信時間を確認すると、どうやら少し前に届いていたものらしかった。とっさに知明は、メールではなく通話画面を開く。

発信ボタンを押すと、規則的な電子音が何回か響く。3コール目で電話が繋がった。

『…もしもし？』

やや不審そうな彼女の声が耳元で囁きかける。電子的に多少の音声変化が加わってはいるが、紛れもない羽根涼子の声に、知明は耳に血が集まるような感覚を覚える。

「もしもし、俺」

『トモさん？どうしたの？』

どうしたの？が何に対するものなのかはっきりしなかったが、知明にとっては、その冷静な声そのものが全ての感覚に響いていた。

「メールくれたでしょ。ありがと。今どこにいる？」

『今は帰る途中』

「え？土曜だよ？会社あったの？」

『お盆明けでね、色々片付かなくて。昼から出たけど、結局こんな時間になっちゃった』

受話器越しに笑う気配と息のかかる音が聞こえる。体のどこかでぞくりと震えが走るのを、知明は感じる。

「……今、どこ？」

無意識に知明の声音が低くなる。しかし電話先の涼子にはそれは感じられなかったようだった。

『今？ああ、ほんと、会社出てすぐくらい』

涼子の答えを聞くと同時に、知明は椅子から飛び上がっていた。

「そこで待ってて！すぐ迎えに行く！」

『…え？』

「いいから！待ってて！」

『いや、待っててと言われても…』

「この後何かあるの？」

『いや、それは何も…』

「じゃ、すぐ行くから！」

『え、あ、ちょ…』
受話器からはまだ涼子の戸惑う声が聞こえていたが、知明はそこで強引に電話を切る。携帯電話を鞄に放り投げると、慌てて私服を身に着ける。
いきなり控え室から飛び出してきた知明の姿に、彼の楽屋に向かう途中だったマネージャーの加々見が、目を丸くする。
「どうしたんですか、ＭＡＣＨＩさん！」
「あ…マネージャー、ちょうどいいとこに。車、貸して？」
そのまま通り過ぎそうな勢いだった知明が、急停止して加々見に向き直った。
「は？え？何ですか、いきなり？」
「いきなりでも何でもいいから。貸して。明日返す」
「明日って、大体あれ社用車ですし。私は今日どうしたらいいんですか」
「ごめん、何とかして！」
話しの通じない知明に、鞄を奪われそうになって、加々見は慌てる。
「何かあったんですか？」
何か緊急事態でも生じたのだろうかと、やっと脳味噌の働き始めた加々見は思うが、知明はあっさり首を振る。
「何かあったわけじゃないけど、俺にとっては大事」
大真面目に頭を振る知明の姿に、加々見は脱力感を覚える。鞄から車のキーを取り出すと、それを知明の手に乗せた。
「……分かりましたよ。くれぐれも事故だけは起こさないように。それと明日、最終日だってこと、忘れないように」
「サンキュ！」
満面の笑みで礼を言うと、すぐに身を翻して知明は駆け去って行った。
「…ＭＡＣＨＩさん、メーク落としてなかった」
今更のように気付いた加々見は、今更のように大きなため息を吐き

出した。

街路樹の植え込みのブロック積みに腰を下ろして待っていた涼子の前に、軽くクラクションを鳴らして車が止まった。助手席の窓が下りて、運転席の人物が手を振っている。それが誰なのか気付いた涼子が目を丸くする。

「トモさん…？車、いつものと違いません？」

助手席に乗り込んだ涼子が知明に囁きかける。

「まあね、マネージャーから車借りた」

言われて涼子が後ろを見ると、後部座席にはボストンバッグやブリーフケースのようなものも見える。それはまずかったんじゃ…と呟く涼子に知明は気にしない、と笑う。

（そうだった、トモさんはそういう人だった）

内心頭を抱える涼子に、知明の手が伸びる。肩を引き寄せられて、ぎゅうっと抱きしめられる。不安定な体勢になるのを支えるため、涼子の手が知明の肘にかかる。一度しっかり抱きしめた後、知明は少し体を離して、涼子の顔を見つめた。涼子は少しためらった後、ゆっくりと顔を上げ、知明の視線を受け止めた。見上げてくる自然な眼差しに、知明は心の底からほっとする。

「涼子サン」

「なに？」

知明の手が、涼子の体のラインを確かめるようにゆっくり撫でる。頭から首筋、肩から背中、脇腹から腰へと、掌がすべる。性的な行為というよりも単純にその存在を慈しむような愛撫は、互いの胸の奥にじんわりとした温かさを生んだ。

再び掌を後頭部にそわし、知明はそっと頭を傾け、涼子の額に自分の額をくっつけた。涼子が僅かに瞳を細める。

「涼子サン」

「なに？」

「…キスしていい？」
「…」
「涼子サン」
「…」
「…涼子サン」
知明の囁く声が涼子の胸に甘い疼きを生む。
涼子がそっと両腕を持ち上げ、知明の頬を掌で包む。そうして、そっと唇を彼のものに押し付けた。
柔らかくて暖かな感触に、知明が一瞬硬直する。しかしすぐに涼子の体に添えた腕に力を入れ、互いの体を支える。
唇を離した涼子が、戸惑ったように眉を顰める。
「トモさん、もしかしてそれ、舞台メーク？」
「……あれ、そういえばメーク落としてなかったっけ」
涼子に指摘されて初めて、知明は自分が着替えも片付けもせずに楽屋を飛び出してきたことに気が付いた。
まあ、家に帰ってからでいいや、と再び涼子を抱きしめる。
「…トモさん、ここ、公共の道路」
「うん」
「いや、うんじゃなくて」
「うん」
「いや、あの、ね…」
「うん」
涼子の首筋に顔を埋めた知明がくぐもった声で返答する。涼子の体を撫でる知明の手が、次第に熱を込めてくるのに気付いて、涼子は焦る。
「トモさん、いや、ちょっと、やばいですって」
慌てて涼子が知明から体を引き離す。顔を上げた知明が、涼子の瞳をじっと覗き込んでくる。車外からの光源だけの暗さの中で、普段より濃い影を刻む知明の顔は、常にも増して色気があった。涼子は不覚にも頬に血が昇るのを感じた。

（…こういう表情はいつまでも慣れないよ……）
反則だ、と涼子は思う。何に対する反則なのかは涼子にも分からないが、そうでも思わなければこの状況にいたたまれなかった。
「涼子サン」
「…なあに？」
涼子の返答に、知明がにっこりと笑って見せた。
「涼子サンに、会いたかったです」
知明の掌がそっと涼子の頭に当てられる。前髪をゆっくりと滑って目元に、頬骨に、そして頬に指が添えられる。
「…この間は、悪かったから。だから、どうしようと思ってて。すごく、連絡取り辛くて」
「…うん」
「わがままなのは分かってるけど、涼子サンから連絡がほしかったんだ」
「……」

涼子にとってもここ数日は気まずかった。
普段は仕事の忙しさで思い返す暇も考える暇もなかったが、それでもふとした拍子に知明のことを思い出すと、どうにもいたたまれない気持ちになった。気にしたくはなくても、マスコミの情報は目から耳から入ってくる。街中や社内でも、雑談や噂話から聞こえてくることもある。目や耳を塞いで生活するわけにいかなければ、慣れるか開き直るかしかない。そう思いはするが、どうにも自分の心の弱さが涼子には辛かった。
マスコミの報道といっても、決定的な情報とか進展した情報とかがあるわけではなかった。ただ、最初の情報を繰り返し、取り上げるだけ。だから、涼子とて本気で本当の情報と思っているわけではなかった。だから、それは単なる自分のコンプレックスと嫉妬心だということには、早くから気付いていた。だからこそ、まるで知明を疑っているかのような自分の反応が自分自身で嫌だった。

涼子の妙な様子を察した苫野からは、「もっと自分にわがままになれ」と言われた。そして改めて自分自身の心と問答し、涼子が出した結論は、「自分に素直になる」ということだった。

知明のことが、好きだと思う。
どんなことをしているのか、気になる。
何を見て、何を考えているのか、知りたいと思う。
自分にできることの何が、知明のためになることなのか。
自分のできることの何が、知明を喜ばせることなのか。
そして、自分は知明に何をしてあげたいと思うのか。

仮に知明にとって自分が一番の存在ではなかったと仮定する。しかしそれは彼の自由であり、自分の強要することではないのではないかと、涼子は思う。
少なくとも今は、知明は涼子の存在を欲してくれていて、涼子の望むことを満たしてくれる。それで充分じゃないのかと、涼子は思った。そう思うことで、涼子は落ち着けるようになったのだ。

「…ごめんね」
「ううん。…涼子サン」
「なに？」
「好きだよ」
「…ありがとう」
微笑む涼子に、知明が口吻ける。強く押し付けて吸い、抱きしめる腕に力を込める。
舌を差し込まれそうになって、涼子はさすがに慌てる。
「トモさん、ここ、公道」
「うん」
頷きながら、知明の手は涼子の腰のラインをなぞる。唇が、涼子の頬に、目元に、顔中に、押し当てられる。

ぞくぞくする震えが体に走るのを涼子は感じるが、それどころじゃないと理性は正常に訴える。
「だから！外で！しかも他の人の車で！そんなことする気はないんです！」

9

涼子を連れて自宅マンションに帰った知明は、まず涼子によってバスルームに押し込まれた。いくらなんでも舞台用の濃いメイクを間近で、しかも明るい場所で見るのは色々努力がいったのだ。

交替で涼子がバスルームを使っている間に、知明は涼子が用意してくれていた紅茶を飲んでいた。食べるものに特にこだわらない涼子の、唯一のこだわりが紅茶で、何度も知明の家に来ているうちに、知明の家にも紅茶葉や茶器一揃いが常備されるようになっていたのだった。しかし知明が一人でいるときは、それは使われることはない。だから今日の紅茶は知明にとって久し振りのリーフティーの味であり、それはつまり、この部屋で涼子の存在を感じることと、同義であった。

バスルームから出てきた涼子が、知明のいるソファの隣に座った。自分用に紅茶を入れ、一口飲んでほっと息をつく。

涼子は、知明のTシャツと短パンを借りて着ていた。まだ少し湿った髪の毛は、まっすぐに彼女の肩に落ちて、毛先を遊ばせていた。

「…あれ？髪の毛、もしかして変えた？」

「ああ、うん、また髪の毛ごっちゃになってたから。ストパーかけた」

分かる？と涼子が首を傾げて笑いかける。

「…俺は、前のがよかったんだけどな」

言いつつ、知明が涼子の髪に手を伸ばす。指先に髪の毛を絡めて、軽く巻いてみる。

「…トモさんは、そう言うよねえ。でも、面倒なんだよ？あれ」

絡むし、ひっかかるし、まとまりにくいし。呟く涼子に、知明が軽く声を上げて笑う。

笑いながら、指に絡めた髪の毛を掴み、涼子に顔を寄せる。引き寄せられながら涼子がそっと目を閉じる。その瞼に知明が唇で触れ

る。
頬のラインをなぞるように唇をゆっくり当て、辿り着いた唇に、優しく唇を重ね合わせる。涼子の腕が知明の背中に廻され、軽くしがみつく。涼子の体を抱きしめる知明の腕に、力がこもる。次第に情熱的になる知明のキスに、涼子も応えていく。
首筋から鎖骨に、何度も口吻け、時折紅い痕を残す。鎖骨の窪みに強く吸い付きながら軽く歯を当てると、涼子が息を詰め、頭を仰け反らせる。
涼子のTシャツの中に手を差し込み、しなる背中に直に触れると、びくりと肌が震える。柔らかい肉の下の骨の感触を探すように指を這わせ、掌で擦ると、涼子がくすぐったそうに身を捩る。その反応が、知明の身体の熱を上げる。
知明が涼子を、ソファの上に倒れこむように押し倒す。大き目のTシャツをたくし上げると、何も着けていない涼子の胸が顕わになる。涼子が頬を紅潮させるのを見て、知明がにっ、と笑みを浮かべる。涼子がそんな知明の表情に軽く眉を上げ、声は出さないまま、口をぱくぱく動かす。おそらく、「ばか」か「すけべ」か、そんなところだろう、と知明は思うが、構わず行為を続ける。
臍の辺りに口吻け、ゆっくりと上に上っていく。両の掌も唇の動きに合わせて、脇腹からゆっくり這い上がる。柔らかい胸のふくらみに辿り付くと、そっとその頂を、舌で舐める。
「きゃっ……」
くすぐったさを耐えるように時折小さく息を詰めるだけだった涼子の口から、小さく悲鳴が漏れる。吊られるように笑みを漏らした知明が、反対側の胸に唇を寄せ、同じように頂を舐めると、そのまま乳房を口に含む。
「うっ……」
涼子の口から、くぐもった声が漏れる。涼子は曲げた肘に口許を押し当てるようにして顔を逸らしていた。反対側の手は、胸を揉んでいる知明の腕を探り、その袖を掴む。

少しひんやりしていた涼子の大き目の胸を、自分の熱で暖めようとするように、知明は何度もそれに触れる。柔らかくて、弾力のあるその感触は、知明が彼女の身体の中で、最も好きな部分でもある。
優しく唇で触れて、強く吸う。掌と指で撫でて、優しく掴む。滑らかな肌の表面の感触と、その奥の、反発するような弾力。そんな執拗な愛撫への従順な反応、それを抑えようとする涼子の仕草。その全てが、知明にとっては何よりも官能的で、刺激になる。
「涼子サン」
顔を隠す涼子に近付き、唇を触れさせる。ゆっくりと腕から顔を上げた涼子が、まぶしそうな目で知明を見上げる。紅潮した顔と、潤んだ瞳に見つめられ、知明は惹き寄せられるように口吻けをし、舌で口内を一頻り、舐める。
「きもちいい？」
唇を離した知明が意地の悪い笑みで問いかける。涼子はそんな知明に眉を顰めるが、無言のままぐい、と彼の頭を抱えて自分に引き寄せると、自分から彼に口吻けをする。不慣れな舌が彼の上唇の裏を舐め、前歯に触れる。
知明の両腕が、少し浮かせた涼子の背中の下に差し込まれ、強く抱きしめた。合わせた唇の間で知明が口を開け、涼子の舌に自分の舌を絡ませて引き込む。涼子が少し苦しそうに眉間に皺を寄せる。知明の身体の重みと、激しいキスを受け止めて、涼子は全身にじわじわと熱が広がるのを感じていく。火照ったように熱くなった指先が抱え込んでいた知明の頭を撫で、その髪の間に指を滑らす。敏感な指の肌が、常よりも更に敏感になって、触れる髪の感触のくすぐったさすら、官能の刺激へと変換して涼子の頭を熱くする。
息を切らして唇を離した知明が、至近距離で涼子を見つめる。
「涼子サン」
掠れたような声で、涼子を呼ぶ。涼子が閉じていた瞼をゆっくり開けて、その隙間から潤んだ瞳で知明を見上げる。
「…ここじゃイヤ」

呟くように言うと、知明の肩に頭を寄せ、抱きついた。知明は彼女を抱きつかせたまま身体を起こすと、そのまま彼女の身体を抱き上げ、寝室へと入っていった。

＊＊＊

その朝は、リビングルームで鳴った携帯メールの着信音で始まった。

まだ早朝と言える時間にけたたましく鳴る携帯電話を、起き出してきた知明が、不機嫌そうに取り上げる。彼と一緒にベッドにいた涼子も、幾分ぼんやりしたままTシャツ姿でリビングに出てきた。

「どしたの？」

「…マネージャー……」

「…加々見さん？どしたの？」

知明が乱暴に携帯電話を閉じると、大きくため息をつきながらソファに勢いよく身を沈める。

マネージャーの加々見恭介から早朝送られてきたメールは、昨夜ミーティングをすっぽかした分、今日は朝から事務所でミーティングをすることを告げるものだった。車もそのときに持ってくるように、と続けられた上に、寝坊しちゃ駄目ですよ、と付け加えられていた。

こんな早朝に、諸々の事情から携帯電話の着信音は切らないことにしている知明のことを知っているはずのマネージャーのこの文面は、昨夜の意趣返しとしか、知明には思えなかった。

知明の簡単な事情説明に、涼子は思わず吹き出した。そして以前会ったことのある加々見の苦労性ぶりを思い出した。そこで更に昨夜の知明の行動を振り返ると、余計に笑いがこみ上げてくるのだった。

憮然としたままの知明をリビングに残したままバスルームで着替え

を済ませた涼子は、キッチンに向かった。手早くコーヒーメーカーをセットすると、冷蔵庫の中から適当に食材を選んで朝食の準備を始める。
「加々見さん、いい人じゃないですか。ちゃんとモーニングコールもしてくれて」
「あれはいい人とは言わない。腹黒って言うんだ」
絶対に、確信犯だ、こいつは、などとぶつぶつ呟く知明に、涼子が呆れたように笑う。笑いながらも知明に着替えてくるように言うと、意外と素直に知明はバスルームに消えた。何だかんだ言って真面目な知明は、多分、可愛いと、涼子は思う。
トーストとサラダとスクランブルエッグ、それにコーヒーで簡単に朝食を摂ると、知明は外出の仕度を始める。涼子はキッチンを片付けてしまうと、リビングでテレビを眺めてぼんやりしていた。涼子は外出、というか帰宅の準備といっても、荷物はバッグ一つだけの上、宿泊の準備など何もしていなかったため、昨夜洗濯しておいた衣服に着替える以外、メイクも何もできない。町に人が増える前にうちに帰らなきゃなあ、などとぼんやり考えていた。
「涼子サン」
声をかけられて顔を上げると、仕度を終えたらしい知明が目の前に立っていた。
「もう出るの？」
腰を上げかける涼子に、知明は頭を振ってそれを制した。
「俺が出かけるのはまだだけど、涼子サンは好きな時間までここにいていいよ」
そう言って知明は、両手で取り上げた涼子の右掌に何かを握った拳を乗せ、涼子の手に何かを握らせると、そっと両手を離した。
涼子が自分の目の前に掌を戻してゆっくり開くと、そこには小さな白い紙の包みがあった。開いた包みの中には、小さなカードキーと銀色の小さな鍵が入っていた。涼子が目を丸くして知明を見上げる。涼子の隣に腰を下ろしていた知明が、その視線を正面から受け

止める。
「それ、ここの鍵。涼子サンにあげる」
「あげる、て…」
「それから、事務所にも話したよ」
「は？」
「別に、公表するとかそんなことじゃないけど。俺に涼子サンがいるってことだけ、伝えとこうと思って。なんか喜んでたよ、マネージャーも社長も」
知明のあっさりした告白に、涼子は眼を白黒するしかない。一体何の話が展開しているのか、すんなり涼子が理解するには時間がかかった。
「ええと、つまり…」
「いつでも好きなとき、ここに来ていいよ、ていうか、できればいつもいてくれると俺としては最高だけど」
少しの間を置いて、涼子がいきなり頬を真っ赤に染めた。
硬直している涼子の身体を知明は抱きしめると、耳まで真っ赤になっている涼子の頭を自分の胸に押し付けた。

いきなり望むものの全てを手に入れるのは無理だと、知明にだって分かっている。しかし、この羽根涼子という人物に関しては、多少強引でもしっかり捕まえておかないといけないことを、約1年ほどの付き合いの内に、知明は理解していた。
自立した上で自分の趣味を追求しようとする『新しい』タイプの女性であるわりには、涼子の人間関係における感覚は、どちらかと言えば古風である。上下関係とか体面とか、そういったことを非常に気にしてしまう。
自分の意志で自分の生き方を決め、そのための努力を惜しまない涼子の姿勢は、知明にとってはこの上ない憧れであった。どんな逆風や強風にも折れず、凛と立つその姿は、『高嶺の花』を思わせた。
だからこそ、知明は彼女に惹かれ、側に置いておきたいと手を伸

ばした。
　そしてきっと、これからも彼女に側にいてほしいと願うなら、自分には今以上の努力が求められるのだろうと、知明は感じていた。しかしそれでも、報われた時に得るものを思うなら、そんなことはなんでもないことだと思えるのだった。

「涼子サン」
　胸元の涼子の耳元に唇を寄せて囁く。ぴく、と身を震わせながら涼子が知明の方に顔を向ける。知明の唇が耳に、頬に、順に触れ、最後に唇に唇を重ねた。
　唇の隙間から舌を差し込むと、反射的に涼子が身体を引く。離れた唇を、もう一度重ね、角度を変えて深く吸い付き、舌を絡ませる。
　家を出るまでのしばらくの時間を、知明は腕の中にいる涼子の存在を確かめることに費やした。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5568d/

高嶺の花

2010年10月8日12時53分発行